



東北大学教養教育院年報

(平成 22 年度)

東北大学教養教育院

Institute of Liberal Arts and Sciences Tohoku University

目 次

は じ め に	1
1. 本学における教養教育実施の経緯	2
2. 教養教育の理念	2
3. 「井上プラン」における教養教育院構想	3
4. 初年次教育の重要性	4
5. 教養教育院の位置づけと任務	4
6. 東北大学教養教育院の構成	6
(1) 教養教育院院長	6
(2) 総長特命教授	6
(3) 教養教育特任教員	8
7. 授業担当科目（平成 22 年度）	10
8. 授業の取り組み・狙い・実施状況	16
(1) 秋葉 征夫	16
(2) 海野 道郎	20
(3) 海老澤丕道	25
(4) 森田 康夫	33
(5) 柳父 圀近	36
(6) 工藤 昭彦	41
(7) 浅川 照夫	46
(8) 水原 克敏	48
(9) 藤本 敏彦	53
9. S L A の実施について	57
10. 『読書の年輪』の発行	61

11. 総長特命教授合同講義の実施	62
12. ティーチング・アシスタント活用への方向づくり	64
13. 会議の実施状況	65
(1) 教養教育院連絡会議	65
(2) 総長特命教授連絡会議	66
(3) 教養教育院総長特命教授懇談会	67
(4) その他の会議	71
14. 語学教育について	72
15. 教養教育院活動（平成 22 年度）の自己評価と今後の課題	75
お わ り に	78
参 考 資 料	
東北大学全学教育広報「曙光」からの転載	79
森田 康夫 東北大学と入学試験 ―現状を分析し将来を考える―	81
柳父 圀近 編集と「普遍的教養」―はるかな思い出から―	84

は じ め に

東北大学は、開学以来「研究第一」「門戸開放」を標榜し、意欲と能力を備えた俊秀を広く世界から受け入れ、世界トップクラスの研究・教育を創造し、社会に大きく貢献してきた。そして 100 周年を経た現在、東北大学は世界リーディングユニバーシティとして新たな 100 年を歩み始めている。東北大学が新たな歩みを始めるために策定されたアクションプラン「井上プラン」においては、知の継承体としての「教育」がその筆頭事項にあげられ、世界で活躍できる総合的人間力のある学生を育成し広く社会に輩出することが謳われている。また、教養教育は、人間力を高め、世界に向けて視野を広げ、専門教育の基礎を確立する観点からも学生に必要不可欠であり、より一層の充実が謳われている。

その中で、平成 20 年 4 月、東北大学は教養教育院を設置した。これは、魅力的な教養教育を実施・展開を目指すために、既設の高等教育開発推進センターと連携して教養教育の実施及び支援を行い、創造力豊かで問題解決能力を有する指導的人材の養成に資することを目的とした組織である。

教養教育院は、教養教育に対する意欲と見識を有する教育担当者を、東北大学総長特命教授として任命した。総長特命教授は、在職中に教育・研究において優れた業績を有するとともに、教育に対して強い情熱を持ち、学生に多大な知的刺激を与え得る能力を有する、本学の名誉教授であり、現在までに 6 名が任命されている。さらに平成 22 年度には新たに特任教員の制度が作られ、教養教育に対する強い情熱と優れた教育能力を有する本学の教員 3 名が、教育、外国語、保健体育の 3 分野から任命された。

教養教育の重要性が改めて強く指摘されている中で教養教育院に寄せられている期待は極めて大きい。教養教育院が、いかにその期待に応え、いかに責任を果たしていくかが重要である。教養教育院は創設以来、講義やゼミなどを含む業務全般にわたり、在り方、実施方法そして改善方法について、定期的に開催する連絡会議等であるべき姿を追求し、実現すべきと判断されたものは、実現に心がけてきた。このように、構成員全員が熱意をもって、教養教育院として果たすべき役割を遂行するために、日夜努力を重ねている。

教養教育院はその活動を自己評価し整理総括するとともに、今後の活動に反映させることを目的として年度報告書を作成し、年報として発表している。昨年度までの年報と同様に、本年度の年報も全学の多くの方々にご覧いただき、ご批判、ご意見をいただきたいと願っている。

本資料をご覧いただき、教養教育院の発展に向けた忌憚のないご意見をいただければ幸いである。

東北大学教養教育院院長

東北大学理事（教育国際交流・情報システム担当）

根 元 義 章

1. 本学における教養教育実施の経緯

平成 3 年の大学設置基準の大綱化を受け、本学では平成 5 年から学部一貫教育の理念の下に教養部を廃止し、教養教育を改革した形での全学教育を開始した。しかし、全学教育を運営・統括する組織の確立が不十分であり、また、情報化やグローバル化、少子化などの時代の流れに対応したものとはならなかった（全学教育改革委員会報告、平成 12 年 4 月）。

平成 12 年 4 月 18 日、評議会において全学教育改革検討委員会報告が了承され、委員会報告に即して平成 14 年 4 月より新しい全学体制で全学教育が開始された。これは特色ある大学教育支援プログラム（特色 GP）に、全学教育の取組である平成 17 年度の「融合型理科実験」と平成 18 年度の「基礎ゼミ」が 2 年連続で採択されたという実績にも現れている。

平成 19 年 3 月の「井上プラン 2007」の発表を契機に、東北大学独自の教養教育カリキュラムの再構築、教養教育の実施体制の充実などの教養教育の充実化の方策が検討、実施されつつある。

2. 教養教育の理念

「知識基盤社会」と言われる 21 世紀において、人々の知的活動・創造力が最大の資源であるわが国にとって、優れた人材の養成と科学技術の振興が不可欠であり、大学教育は技能や知識の習得のみを目的とするのではなく、全人格的な発展の礎を築くものである（中央教育審議会、平成 17 年 2 月 1 日）。

21 世紀の国際社会において、政治・経済面はもとより人類の未来にはだかる地球環境問題など地球規模の諸問題解決への貢献、人類共通の知的資産の創造、新たな文化や価値観の創造などの面において、国際社会で知的リーダーシップを発揮できる人材の養成が必須である（大学審議会、平成 10 年 10 月 26 日）。

20 年 3 月の中央教育審議会大学分科会の「学士課程教育の構築に向けて」において、「大学は教育の質を高め、成績評価の厳格化を図り、卒業生の質を保証することや、大学は社会人としての基礎的能力と専門的能力を備えた卒業生を送り出すこと」が指摘されている。

社会の高度化・複雑化が進む中で、「主体的に変化に対応し、自ら将来の課題を探究し、その課題に対して幅広い視野からの柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力」（課題探究能力）と育成が重要であるとの視点に立ち、「学問のすそ野を広げ、さまざまな角度から物事を見ることが出来る能力や、自主的・総合的に考え、的確に判断する能力、豊かな人間性を養い、自分の知識や人生を社会の関係で位置づけることのできる人材を育てるのが、教養教育の理念・目標である（大学審議会、平成 10 年 10 月 26 日）。

「井上プラン 2007」では、「教養教育は、学生にとって人間力を高め、世界に向けて視野を広げ、専門教育の基盤を確立するために必要不可欠であり、異分野融合研究を創造していくためにも重要であり、もって『知の創造体』を担う高度な教養、専門的な知識および国際的な視野を備えた指導的人材を育成する」と謳われている。

3. 「井上プラン」における教養教育院構想

「知識基盤社会における大学教育の量的拡大（ユニバーサル段階）を積極的に受け止めつつ、社会からの信頼に応え、国際通用性を備えた学士課程教育の構築を目指す」ことが平成 20 年 3 月の中央教育審議会大学分科会の「学士課程教育の構築に向けて」において提唱されている。

本学が名実ともに「世界リーディング・ユニバーシティ」であるためには、知の継承体としての「教育」が重要であり、その継承者を広く社会に輩出することが主要な社会貢献の一つである。

このような理念の下に具体策として、①東北大学独自の教養教育カリキュラムの再構築、②教養教育の実施体制の充実、を提示し、世界へ飛翔するための英語能力を強化し国際的感覚を身につけること、さらには独創的研究や異分野融合の研究の創造に不可欠な大学院生対象の教養教育を創出することなどを目標としている（総長井上明久、「曙光」平成 20 年 4 月号）。

井上プラン 2007（2009 年度改訂版）および井上プラン 2007（2010 年度改訂版）では、「教養部の廃止以降、高等教育開発推進センターを中心に教養教育を推進し、実績を上げてきたが、より高度な教養を身に付けた学生の育成には、教養教育の実施体制の更なる整備が必要である。また、国際コミュニケーション能力をはじめとする教養教育を担える幅広い知識と経験のある教員を確保し、学部から大学院へつながる研究の面白さを理解させる講義の充実が急務となっている。このような実施体制の充実の一環として、平成 20 年度から総長特命教授（教養教育）の発令を行い、その所属組織である教養教育院を創設した。」と教養教育を重視する方向性に至る経緯を明らかにしている。

教養教育重視の具体的プランとして、①教員の資質の一層の向上を図るとともに、教養教育に対し意欲的に取り組む教員を積極的に確保する。あわせて、当該教員に対するインセンティブ及び評価方法について検討する。②教養教育に取り組む教員を「教養教育特任教員」として教養教育院に兼務する制度を導入する。③教養教育を総合的に統括し、科目設定、教員人事、学生支援等に責任を持つ組織体制を整備する。④学生の教養教育の理解を深めるため、スチューデントアドバイザー制度（仮称）を導入する。助教や TA、RA とも連携した効果的な教育体制の確保を図る。以上の 4 点を提議した。

これらを具体的に遂行するための一つとして、「幅広い知識と深い研究経験のある退職教授を総長特命教授（教養教育）として配置し、研究中心大学として、初年次学生ばかりでなく大学

院生も対象として教養教育を担う」制度を新設された（平成 20 年度）。さらに、「教養教育に取り組む教員を教養教育特任教員として教養教育院に兼務する制度を検討する」ことが決定された（平成 22 年度）。これが「教養教育院」構想である。

4. 初年次教育の重要性

平成 20 年 3 月の中央教育審議会大学分科会の「学士課程教育の構築に向けて」において学士課程教育における初年次教育の重要性が指摘され、「初年次教育は高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習及び人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、おもに新入生を対象に総合的に作られた教育プログラム」と位置付けられている。これを受けて、大学として「学びの動機付けや習慣形成に向けて、初年次教育の導入・充実を図り、学士課程全体の中で適切に位置づける」ことが今後の改革の方策として述べられている。

さらに、「大学生活への適応、当該大学への適応（自分の居場所作り、自校の歴史の学習等）、大学で必要な学習方法・技術の会得、自己分析、ライフプラン・キャリアプランづくりの導入などの要素を体系化する（例：フレッシュマンゼミ、基礎ゼミなど）。また、きめ細かな学習アセスメントを実施し、学生の現状や変化の客観的な把握に努める」ことが示されている。

5. 教養教育院の位置づけと任務

これまで、教養教育の改革として、学部の枠にとらわれない少人数教育としての「基礎ゼミ」、文科系の学生を対象にした自然科学総合実験の創出、英語教育の充実などが実施されてきた。さらに、高い能力を持つ本学学生が学ぶことへのモチベーションを高め、大学入学当初から学生の学習への興味を引き出すことが必要であるとされた。

本学の「教養教育プロジェクト・チーム報告書」（平成 19 年 9 月 28 日）において、「特命教授」は「研究の基本姿勢やその魅力と醍醐味などを直接学生に伝えることによって、本学の新入学生に対して大学という学びの場における新たな知的刺激を与え、学習意欲や研究意欲の更なる向上を図ることに貢献する」と答申され、「特任教員」制度については、「教養教育に対する強い情熱と優れた教育能力を有する本学の教員を、本学の教養教育を専ら担当する「（教養教育）特任教員」として総長の直接の任命により任用する」制度とされている。

「特命教授」は、同報告書「（教養教育）特務教授」（仮称）制度（案）の概要」の「1. 位置付けと任務」の項目の中で、次のように規定されている。

- (1) 在職中に教育・研究で優れた実績を有し、教育に対して情熱を持つ、本学の退職教授を、定年退職後に本学の教養教育科目を担当する教員として再雇用する制度

- (2) 総長より特別に教養教育を主な任務として任じられた教員
- (3) 学生の学習意欲を高め、研究の真髄と面白さを伝えるなど、研究大学にふさわしい魅力的な教養教育を創出する教員

「特任教員」は、同報告書「(教養教育) 特任教授」(仮称) 制度(案) の概要」の「1. 位置付けと任務」の項目の中で、次のように規定されている。

- (1) 教養教育に対する強い情熱と優れた教育能力を有する本学の教員で、教養教育を中心とする教育・研究を行うことを任務とする教員制度
- (2) 総長により特別に教養教育を主な任務として任じられた教員
- (3) 学生の学習意欲を高め、研究大学にふさわしい魅力的な教養教育を創出する教員

6. 東北大学教養教育院の構成

教養教育院は、平成 22 年 4 月 1 日現在、以下のように構成されている。

(1) 教養教育院院長

根元 義章（ねもと よしあき）

東北大学理事（教育・情報システム担当）

（平成 22 年 10 月 1 日より、教育国際交流・情報システム担当）

(2) 総長特命教授

・秋葉 征夫（あきば ゆきお）

東北大学助教授、教授、農学研究科長 平成 19 年 3 月定年退職

現在：総長特命教授（教養教育院）、東北大学名誉教授

研究領域：動物栄養生化学、動物生命科学、家禽学、農学

教育実績：農学部および農学研究科における授業と研究指導

基礎ゼミ（平成 15 年度）

名古屋大学、信州大学、鹿児島大学、宮崎大学、宮城教育大学等における集中講義

主な受賞：日本畜産学会賞、International Animal-Agriculture Award for Research – 2003、日本畜産学会功労賞、日本農学賞（読売農学賞）

学会活動：日本家禽学会（元会長、元編集委員長）、日本畜産学会（元理事）東北大学畜産学会（元評議員）、British Journal of Nutrition 誌（元編集委員）

・海野 道郎（うみの みちお）

関西学院大学助教授、東北大学助教授、教授、評議員 平成 20 年 3 月定年退職

現在：総長特命教授（教養教育院）、東北大学名誉教授（大学院文学研究科）

研究領域：理論社会学、環境社会学、社会意識論

教育実績：文学部および文学研究科における授業と研究指導

全学教育における基礎ゼミ、現代学問論

文部省統計数理研究所併任

北海道大学、岩手大学、東京大学、東京都立大学、明治学院大学、信州大学、名古屋大学、大阪大学、関西学院大学等における集中講義

主な受賞：社会科学国際フェロー（通称：新渡戸フェロー。事務局：（財）国際文化会館（1978 年 7 月～1980 年 7 月）

福武直賞（1991 年 7 月、共同）

学会活動：日本社会学会（前財務理事、元編集委員長）、数理社会学会（元会長、元編

集委員長、元研究担当理事)、環境社会学会(元会長、元編集委員長。元事務局長)、東北社会学会(元会長、元研究担当理事)、日本行動計量学会(元理事、元編集委員、元運営委員)

・海老澤 丕道(えびさわ ひろみち)

東北大学助教授、教授、情報科学副研究科長、平成19年3月定年退職

現在:総長特命教授(教養教育院)、東北大学名誉教授

研究領域:物性物理学理論、ゆらぎ科学

教育実績:情報科学研究科・工学研究科・工学部における授業と研究指導

全学教育における物理学A・同B・基礎ゼミ・現代学問論担当

東京大学・名古屋大学・九州大学における集中講義

東北工業大学・東北文化学園大学・仙台高専非常勤講師

主な受賞:昭和48年9月仁科財団海外派遣研究者

学会活動:日本物理学会、数式処理学会、日本ゆらぎ現象研究会

・森田 康夫(もりた やすお)

北海道大学助教授、東北大学助教授、東北大学教授、東北大学評議員、東北大学総長特別補佐(交通)、平成21年3月定年退職

現在:総長特命教授(教養教育院)、東北大学名誉教授

研究領域:数学(整数論)、数学教育、入学試験

教育実績:理学部及び理学研究科における授業と研究指導

全学教育科目:基礎ゼミ、現代学問論、自然論、数学(線形代数学、数理統計学、解析学D)

北海道大学における授業と研究指導

北海道大学、岩手大学、埼玉大学、東京大学、都立大学、名古屋大学、金沢大学、京都大学、大阪大学、広島大学、九州大学、プノンペン王立大学等における集中講義

主な受賞:作行会奨学生

学会活動:日本数学会(元理事長、監事)、日本数学協会、日本数学教育学会、国際教育学会(顧問)

・柳父 圀近(やぎゅう くにか)

青山学院大学講師、東北大学助教授、教授、法学研究科長、平成21年3月停年退職

現在:総長特命教授(教養教育院)、東北大学名誉教授

研究領域:西洋政治思想史、西洋社会思想史

教育実績:法学部および法学研究科における授業と研究指導

全学教育科目 基礎ゼミ、現代日本の法と政治

青山学院大学、横浜国立大学、慶応大学、ミュンヘン大学等で講義
学会活動：政治思想学会、日本政治学会、経済学史学会、日本ピューリタニズム学会

・工藤 昭彦（くどう あきひこ）

東北大学助教授、教授、農学研究科長 平成 20 年 3 月定年退職

現 在：総長特命教授（教養教育院）、東北大学名誉教授

研究領域：農業経済学

教育実績：農学部および農学研究科における授業と研究指導

岩手大学、北里大学における集中講義

学会活動：現在、東北農経学会会員

（3）教養教育特任教員

・浅川 照夫（あさかわ てるお）

北見工業大学講師、助教授、金沢大学助教授、東北大学助教授、教授、国際文化研究科長

現 在：東北大学高等教育開発推進センター教授

研究領域：英語学、英語教育

教育実績：国際文化研究科における研究指導

全学教育科目：英語 A1、英語 A2、英語 B1、英語 B2、英語 C2

学会活動：日本英文学会、日本英語学会、Linguistic Society of America

・水原 克敏（みずはら かつとし）

東北大学教育学部講師、同助教授、同教授、教育学研究科教授、東北大学評議員、教育学研究科副研究科長

現 在：教育学研究科教授、教養教育院特任教員、評議員、総長特任補佐、東北大学
ディスティングイッシュト・プロフェッサー

研究領域：カリキュラム、教員養成

教育実績：教育学部及び教育学研究科における授業と研究指導

全学教育における基礎ゼミ「現代の教育問題について解決策を提案する」、
展開科目「学校を考える」、展開科目「教育学」

筑波大学、京都大学、麗澤大学等で集中講義

主な受賞：東北大学総長教育賞、全学教育貢献賞、東北大学沢柳賞、モンゴル国教育文化科学省より教育分野功労者賞

学会活動：日本教育学会（元理事）、日本教師教育学会（理事）、教育史学会（元紀要編集委員）、東北教育学会会長、日本教育方法学会理事。日本カリキュラム学会代表理事

その他：東北大学出版会理事・編集委員、東北大学学校ボランティアを組織

・藤本 敏彦（ふじもと としひこ）

東北大学助手、Turku大学(フィンランド)・日本学術振興会 特定国派遣研究員、東北大学講師、東京都老人総合研究所・協力研究員

現 在：教養教育特任教員（教養教育院）、高等教育開発推進センター准教授

研究領域：スポーツ科学、運動学、生理学

教育実績：全学教育および医学系研究科・障害科学専攻における授業と研究指導

全学教育「基礎ゼミ」「スポーツA」「スポーツB」「体と健康」「生命と自然」
担当

医学系研究科「大学院後期課程の博士論文指導」担当

筑波大学、鹿屋体育大学における特別授業・セミナー

主な受賞：European College of Sports Science Young Investigators Award, Copenhagen, Denmark,－1997、第60回日本体力医学会奨励賞、岡山－ 2005.

学会活動：日本体力医学会（評議員）、European College of Sports Science、日本体育学会、日本運動生理学会、日本核医学会

7. 授業担当科目（平成 22 年度）

（1）秋 葉 征 夫

（第 1 セメスター）

- ・展開科目（総合科学（総合科目）） 「食から探る生物・生命・暮らしの科学」
火曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：160 名
- ・基幹科目（自然論） 「生命と自然」 鳥とニワトリの生物科学
水曜日 3 時限 対象：医・歯・薬・工 受講学生数：197 名
- ・基幹科目（自然論） 「生命と自然」 鳥とニワトリの生物科学
木曜日 2 時限 対象：文系・理・農 受講学生数：86 名
- ・共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 食の比較生化学ーヒトと動物ー
月曜日 3ー4 時限（隔週） 対象：全学部 受講学生数：11 名
- ・共通科目（転換・少人数科目）
「基礎ゼミ」 ペット栄養から観るヒトの食と栄養代謝
木曜日 3ー4 時限（隔週） 対象：全学部 受講学生数：16 名

（第 2 セメスター）

- ・展開科目（総合科学（総合科目）） 「食から探る生物・生命・暮らしの科学」
火曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：112 名
- ・展開科目（総合科学（総合科目）） 「食から探る生物・生命・暮らしの科学」
木曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：30 名
- ・基幹科目（自然論） 「生命と自然」 鳥とニワトリの生物科学
水曜日 2 時限 対象：医・歯・薬・工 受講学生数：120 名

（2）海 野 道 郎

（第 1 セメスター）

- ・基幹科目（社会論） 「社会の構造」 社会の成り立ち：ミクロレベルのメカニズム
水曜日 1 時限 対象：文・教・法・経・理・農 受講学生数：29 名
- ・基幹科目（社会論） 「社会の構造」 社会の成り立ち：ミクロレベルのメカニズム
水曜日 3 時限 対象：医・歯・薬・工 受講学生数：67 名
- ・共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 人と社会ー未知の世界を拓くー
月曜日 3 時限 対象：全学部 受講学生数：19 名
- ・共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 事実を探るー情報と現実の間ー
木曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：19 名

（第 2 セメスター）

- ・基幹科目（社会論） 「社会の構造」 社会の成り立ち：マクロレベルのメカニズム
月曜日 4 時限 対象：医・歯・薬・工 受講学生数：39 名

- ・基幹科目（社会論） 「社会の構造」 社会の成り立ち：マクロレベルのメカニズム
水曜日 1 時限 対象：文・教・法・工・保 受講学生数：26 名
- ・展開科目（総合科学（総合科目）「社会的決定を報道に探る」
火曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：18 名
(内、東北学院大学生 1 名)
- ・展開科目（総合科学（総合科目）「社会的ジレンマ：環境問題の基本メカニズム」
木曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：4 名
(内、宮城第一高等学校生 4 名)

(3) 海老澤 丕 道

(第 1 セメスター)

- ・基幹科目（自然論） 「自然界の構造」 おはなし物理学 物理未習者向
木曜日 2 時限 対象：文系・理・農 受講学生数：85 名
- ・展開科目（総合科学（総合科目）
「科学と人間」 人はなぜ科学をするか、科学は人に何をもたらすか：物理学の場合
火曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：15 名
- ・共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 「ゆらぎ」を科学する
月曜日 4、5 時限隔週 対象：全学部 受講学生数：20 名
- ・共通科目（転換・少人数科目）
「基礎ゼミ」 創造的な研究とは：ノーベル物理学賞に学ぶ
月曜日 4、5 時限 対象：全学部 受講学生数：20 名

(第 2 セメスター)

- ・基幹科目（自然論） 「自然界の構造」 おはなし物理学 物理未習者向
月曜日 3 時限 対象：文系・保・工 受講学生数：376 名
- ・基幹科目（自然論） 「自然界の構造」 おはなし物理学 物理既習者向
火曜日 1 時限 対象：文系・理・農 受講学生数：98 名
- ・基幹科目（自然論） 「自然界の構造」 おはなし物理学 物理既習者向
木曜日 2 時限 対象：経・理・医・保・歯・薬・工・農 受講学生 192 名
- ・展開科目（総合科学（総合科目）
「科学と人間」 人はなぜ科学をするか、科学は人に何をもたらすか：物理学の場合
火曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：37 名（内、大学院生の聴講 1 名）
- ・展開科目（総合科学（総合科目）
「科学と人間」 人はなぜ科学をするか、科学は人に何をもたらすか：物理学の場合
木曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：31 名（内、高等学校生徒 6 名）

(4) 森 田 康 夫

(第 1 セメスター)

- ・ 基幹科目 (自然論) 「科学と情報」 数学と人間 ― 数学を俯瞰する
木曜日 2 時限 対象：文系・理・農 受講生 69 名
- ・ 展開科目 (総合科学 (総合科目)) 教育と科学技術
火曜日 5 時限 対象：全学部 受講生 13 名
- ・ 共通科目 (転換・少人数科目)
「基礎ゼミ」 学校教育の在り方と入学試験の功罪を考える
月曜日 4 時限 対象：全学部 受講生 20 名
- ・ 共通科目 (転換・少人数科目)
「基礎ゼミ」 学校教育の在り方と入学試験の功罪を考える
木曜日 5 時限 対象：全学部 受講生 17 名

(第 2 セメスター)

- ・ 基幹科目 (自然論) 「科学と情報」 数学と人間 ― 数学を俯瞰する
月曜日 4 時限 対象：文系・理・農 受講生 133 名
- ・ 基幹科目 (自然論) 「科学と情報」 数学と人間 ― 数学を俯瞰する
木曜日 2 時限 対象：経・医・保・歯・薬・工・農 受講生 55 名
- ・ 展開科目 (総合科学 (総合科目)) 「教育と科学技術」
火曜日 5 時限 対象：全学部 受講生 23 名
- ・ 展開科目 (総合科学 (総合科目)) 「大学の社会的機能」
木曜日 5 時限 対象：全学部 (4 セメ) 受講生 2 名

(5) 柳 父 園 近

(第 1 セメスター)

- ・ 基幹科目 (社会論) 「法・政治と社会」 政治学入門
水曜日 3 時限 対象：医・歯・薬・工 受講学生数：188 名
木曜日 2 時限 対象：文系・理・農 受講学生数：80 名
- ・ 共通科目 (転換・少人数科目)
「基礎ゼミ」 丸山真男『文明論の概略を読む』を読む
隔週月曜日 3、4 時限 対象：全学部 受講学生数：16 名
- ・ 共通科目 (転換・少人数科目)
「基礎ゼミ」 丸山真男『「文明論の概略」を読む』を読む
隔週月曜日 3、4 時限 対象：全学部 受講学生数：12 名

(第 2 セメスター)

- ・ 展開科目 (総合科学 (総合科目)) 「西洋史と政治思想」
火曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：45 名
木曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：56 名

- ・基幹科目（社会論） 「歴史と人間社会」 職業観念から見る社会史
水曜日 3 時限 対象：医・歯・薬・工 受講学生数：81 名
木曜日 3 時限 対象：文・教・法・保 受講学生数：100 名

（6）工 藤 昭 彦

（第 1 セメスター）

- ・基幹科目（社会論） 資本主義と農業－世界恐慌・ファシズム体制・農業問題－
火曜日 1 時限 対象：医・保・歯・薬・工 受講学生数：107 名
- ・共通科目（転換少人数科目）
「基礎ゼミ」 「農」の世界から見えるもの－ゼミと体験学習を通して考える－
月曜日 3 時限 対象：全学部 受講学生数：20 名
- ・共通科目（転換少人数科目）
「基礎ゼミ」 現代日本の「食」について－ゼミと体験学習を通して考える－
木曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：20 名
- ・展開科目（総合科学（総合科目）） 時代の文脈からみた「食」と「農」
火曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：26 名
- ・展開科目（総合科学（総合科目）） 時代の文脈からみた「食」と「農」
金曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：26 名（他高校生 6 名）

（第 2 セメスター）

- ・基幹科目（社会論） 資本主義と農業－世界恐慌・ファシズム体制・農業問題－
火曜日 1 時限 対象：文系・理・農 受講学生数：110 名
- ・展開科目（総合科学（総合科目）） 環境と経済・社会の調和に関する思想と倫理
月曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：19 名
- ・展開科目（総合科学（総合科目）） 環境と経済・社会の調和に関する思想と倫理
火曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：33 名

（7）浅 川 照 夫

（第 1 セメスター）

- ・共通科目英語 「英語 A1」
水曜日 3 時限 対象：理 受講学生数：35
金曜日 4 時限 対象：経 受講学生数：42
- ・共通科目英語 「英語 B1」
水曜日 1 時限 対象：医歯薬 受講学生数：85
木曜日 1 時限 対象：保 受講学生数：32
木曜日 3 時限 対象：工 受講学生数：42
金曜日 1 時限 対象：文教 受講学生数：38

(第2セメスター)

・ 共通科目英語 「英語 A2」

月曜日 3 時限 対象：理 受講学生数：32

木曜日 1 時限 対象：医歯薬 受講学生数：35

金曜日 1 時限 対象：工 受講学生数：32

・ 共通科目英語 「英語 B2」

月曜日 3 時限 対象：経 受講学生数：36

木曜日 3 時限 対象：工 受講学生数：44

(第4セメスター)

・ 共通科目英語 「英語 C2」

水曜日 1 時限 対象：医歯 受講学生数：33

(8) 水 原 克 敏

(全学教育・第1セメスター)

・ 共通科目 (転換・少人数科目)

「基礎ゼミ」 現代の教育問題について解決策を提案

月曜日 3 講目 対象：全学部 受講生 21 名

・ 展開科目 (総合科学 (総合科目)) 「学校を考える」 教育諸科学から学校を考察

木曜日 5 講目 対象：全学部 受講生 20 名 (内、宮城第一高等学校生徒 9 名)

・ 展開科目 (社会科学 (教育学)) 「教育学」 (文系) 学校を歴史的に概説

火曜日 2 講目 対象：文系学部 受講生 94 名

・ 展開科目 (社会科学 (教育学)) 「教育学」 (理系) 学校を歴史的に概説

木曜日 3 講目 対象：理系学部 受講生 44 名

木曜日 3 時限 対象：工 受講学生数：44

※教育学部・教育学研究科における授業は省略

(9) 藤 本 敏 彦

(第1セメスター)

・ 共通科目 スポーツ A 「ソフトボール」

水曜日 2 時限 対象：医・歯・薬 受講学生数：52 名

・ 共通科目 (転換・少人数科目) 「基礎ゼミ」 マッスル

月曜日 3 時限 対象：全 受講学生数：20 名

・ 基幹科目 生命と自然 (一部担当)

水曜日 1 限目 対象：全 受講学生数：171 名

(第2セメスター)

- ・ 共通科目 スポーツ A 「ソフトボール」
 - 火曜日 3 時限 対象：農 受講学生数：48 名
 - 木曜日 2 時限 対象：法 受講学生数：64 名
 - 金曜日 3 時限 対象：理 受講学生数：33 名
- ・ 共通科目 体と健康 「身体の文化と科学」(一部担当)
 - 月曜日 4 時限 対象：全 受講学生数：68 名

(第 3 セメスター)

- ・ 共通科目 スポーツ A 「ソフトボール」
 - 火曜日 2 時限 対象：工 A 受講学生数：48 名
 - 火曜日 4 時限 対象：工 B 受講学生数：52 名
 - 水曜日 4 時限 対象：工 C 受講学生数：34 名
- ・ 共通科目 スポーツ B 「ソフトボール」
 - 水曜日 3 時限 対象：全 受講学生数：37 名
- ・ 共通科目 スポーツ B 「武道」
 - 木曜日 3 時限 対象：全 受講学生数：10 名

(第 4 セメスター)

- ・ 共通科目 スポーツ B 「武道」
 - 水曜日 3 時限 対象：全 受講学生数：15 名

8. 授業の取り組み・狙い・実施状況

(1) 秋 葉 征 夫

a. 教養教育院教授としての授業の狙いと取り組み

教養教育では、専門的な知識・技術とともに豊かな人間性、感性、思考能力を持ち、物事を多視的に見ることを通して課題探求能力と解決能力を培い、広い分野で社会のリーダーとして活躍できる人材を育てる観点で、以下の点を教育の主な狙いとした。

- ① 大学卒業生の多くは必ずしも専門分野の仕事をするだけではなく、関連分野・領域あるいは学生時代の専門とは離れた領域でも中堅的な仕事をしている場合も多いことを考慮して、講義は文理融合型の内容とし、講義（理系・生命科学）の中に文系的観点での講義（話）を 30%以上含める。
- ② 教養教育の重要性を自己認識するのは、卒論研究や大学院研究などで学生の主体的作業が開始された時期が多いとの観点で、講義の中に、教員の専門領域の研究成果、最新の研究情報の紹介を 20%以上含める。特に、学術探究の苦しさとし、研究の視点の設定法、研究の展開方法、予測・結果・考察の総合化の大事さ、研究の失敗談などを強調する。
- ③ ミニットペーパーやレポートなどを通して、客観的な（主観的ではない）記述の仕方、理系の作文技術、話し方などを学ばせる。
- ④ 映像（DVD、ビデオ）を適宜用いて視覚面からの興味を引き出すとともに、講義はパワーポイントを用いて行う。
- ⑤ 講義の中で学生に発表させる時間を設け、主体的な考えに基づく客観的・総括的な発表を試みさせる。

b. 各授業の実施状況

①展開科目（総合科学（総合科目）） 「食から探る生物・生命・暮らしの科学」

人を含めたすべての動物の生命はそれぞれの食料に依存している。現在直面している人口・食料・資源問題の基盤を理解するとともに、食に依存する生命活動と食を供給する農の世界に「食」のキーワードで切り込み、暮らしにかかわる身近な課題を科学する資質を養う。

講義では、食に関する基礎情報を紹介するとともに DVD を適宜使用して視覚による学習で補足し、さらに食に関する新聞記事、Nature や Science 記事などの最新情報を紹介した。また、「研究とは何か」を学生に伝える観点で、生命機能に関する教員の研究成果を数回に分けて理解しやすいように紹介した。食に関しての調査を学生に行わせ、その成果を講義の中で発表させた。受講学生数が 100 名以上であったため、学生からの発表時間もきわめて短時間に設定せざるをえず、十分な討論を行うことはできなかった。毎回の講義

終了前 10ー15 分間をミニットペーパーの作成記入時間として設定し、学習内容、その考察と感想、質問と要望などを記入させ、自分の考え方を短時間でまとめて客観的に記述する練習をさせる時間とした。質問については次回の講義時間の最初の約 15 分間を割いて回答した。また、大人数の講義であったがために、きめ細かな対応や授業のコントロールには課題を残した。

②基幹科目 「生命と自然」 鳥とニワトリの生物学

鳥類の起源、鳥類に特異的な飛翔や産卵、そしてニワトリの開発と育種改良、ニワトリの脂質・糖代謝特性、栄養代謝特性などを理解し、生物の生命機能について比較生物学的視点から学習させる。

講義では、鳥類の特性から生命について考えさせる観点での解説を行うとともに、鳥類の DVD を適宜使用し、さらに鳥類保護に関する新聞記事などの最新情報を紹介した。また、「研究とは何か」「研究のわくわくするところ」を学生に伝える観点で、鳥の代謝・機能に関する教員の研究成果を分かりやすく紹介した。講義ではパワーポイントを用いて説明し、また、その図表を延べ 30 枚のプリント (A4 判) として配布した。鳥類の特徴に關しての調査を学生に行わせ、その成果を講義の中で一人当たり 2 分間で発表させた。毎回の講義終了前 10ー15 分間をミニットペーパーの作成記入時間として設定し、学習内容、その考察と感想、質問と要望などを記入させ、自分の考え方を短時間でまとめて客観的に記述する練習をさせる時間とした。質問については次回の講義時間の最初の約 15 分間を割いて回答した。大人数の講義であったがため、きめ細かな対応や授業のコントロールには課題を残した。一方、第 1 セメスターでの一つの授業は 80 名程度であり、教室の全体の雰囲気をつかめながら授業を進めることができたものと感じる。

③共通科目 (転換・少人数科目)「基礎ゼミ」食の比較生化学ーヒトと動物ー

21 世紀社会の大切な課題である「食と健康」に注目し、ヒトと各種動物の食と栄養について生化学的立場から比較観察し、私たちの暮らしと環境の中の多様な生物と生命の仕組みとそれらを支える食について理解する。

授業では、DVD を適宜使用し、さらに人や動物に関する新聞記事などの最新情報を紹介した。動物の代謝・機能に関する教員の研究成果の紹介することにより、研究の面白さ・苦しさ・独創性の重要性など、学生の将来の研究に導けるような講義内容に配慮した。食に関する調査研究の場として農学研究科・農学部のキャンパスに引率し、動物や植物が研究に最適に用いられている現場の見学を行った。さらに、学生に食の比較に関するテーマを与えて調査させ、それを基に討議を踏まえたまとめ作業を行わせ、その成果を発表させるとともに学生自体が主体となる討論を経験させ、ミニミニ研究の楽しさを経験させるように工夫した。毎回の講義終了前 10ー15 分間をミニットペーパーの作成記入時間として設定し、学習内容、その考察と感想、質問と要望などを記入させ、自分の考え方を短時間でまとめて客観的に記述する練習をさせる時間とした。質問については次回の講義時間の

最初の約 15 分間を割いて回答し、できるだけ双方向性の授業になるように企画した。

④共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」ペット栄養から観るヒトの食と栄養代謝

21 世紀社会の豊富な食環境の中で、大切な課題である食と健康に注目して、私たちと伴侶動物としてのペットの食と栄養代謝を生化学的立場から比較観察し、各種環境の中で生物・生命の仕組みを考え、その基盤となる食と栄養について理解する。

授業では、DVD を適宜使用し、さらに人やペットに関する新聞記事などの最新情報を紹介した。動物の代謝・機能に関する教員の研究成果の紹介することにより、研究の面白さ・苦しさ・独創性の重要性など、学生の将来の研究に導けるような講義内容に配慮した。食に関する調査研究の場として農学研究科・農学部のキャンパスに引率し、動物や植物が研究に最適に用いられている現場の見学を行った。さらに、学生にペットと人そして食の比較に関するテーマを与えて調査させ、それを基に討議を踏まえたまとめ作業を行わせ、その成果を発表させるとともに学生自体が主体となる討論を経験させ、ミニミニ研究の楽しさを経験させるように工夫した。毎回の講義終了前 10－15 分間をミニトペーパーの作成記入時間として設定し、学習内容、その考察と感想、質問と要望などを記入させ、自分の考え方を短時間でまとめて客観的に記述する練習をさせる時間とした。質問については次の講義時間の最初の約 15 分間を割いて回答し、できるだけ双方向性の授業になるように企画した。

c. 学生授業評価とその評価に基づく改善

①展開科目（総合科学（総合科目）） 「食から探る生物・生命・暮らしの科学」

授業評価では、出席率は 90%以上を占めていた。意欲的に取り組んだ学生は平均値である。講義がよく準備されたこと、説明が比喩しやすかったこと、聞き取りやすかったこと、速度が適度であること、総合判断で良い＋非常に良いが 92%であり、これは総合科目の平均値を大きく上回り、高い評価を受けたものと考えられる。また、講義満足できるとする学生も 90%と総合科目平均の 80%を上回った。一方で、意欲的に取り組んだ学生の割合は比較的多かったが、自習した学生が少ないことなどが問題点となっている。今後は、学生の学習意欲を引き出すこと、予習する態度を持たせること、などが課題となる。一方、授業にできるだけ集中させるように本年度は配布資料に自分で書きこませる工夫を行った。成績は A 評価以上が大多数であったが、不合格も 5%以下存在した。

一方、第 2 セメスターの火曜日の講義の学生評価では、講義を有意義と感じた割合や総合判断で「良い＋非常に良い」とした割合が科目平均とほぼ同等の評価を受けた。木曜日の授業は評価が高く、第 1 セメスターの授業と同様に全体に高い評価を得た。

改善方向としては、大人数の講義ではあるが、学生との討論も含め、できるだけ双方向性の授業にする工夫が必要である。さらに、TA を効果的に活用することも必要であろう。200 人を超える授業でのスキルが特別に必要であろうが、授業のコントロールの仕方を工夫する必要がある。また、出席を自動的に把握する設備の設置を要望するなど必要であ

ろう。

②基幹科目 「生命と自然」 鳥とニワトリの生物科学

第1セメスターの授業評価では、出席率は高く、大体意欲的に取り組んだ学生が多い。講義がよく準備されたこと、説明が理解しやすかったこと、聞き取りやすかったこと、速度が適度であること、視聴覚機器の利用が有効であったこと、満足度が+以上が80%を占めたこと、総合評価で「良い+非常に良い」が80-88%であり、一定の高い評価を得た。第2セメスターの授業評価では、教員の熱意を感じたとする学生(+以上)が90%であったこと、満足度が+以上が88%を占めたこと、総合評価で「良い+非常に良い」が92%であり、高い評価を得た。

しかし、意欲的に取り組んだ学生の割合が73%と意欲は示されたが、自習した学生が少ないことなどが問題点となる。成績はA評価以上が大多数であり、AA評価も多いが、一部不合格の学生もあった。学生授業評価は大体良いように思われるが学生に口頭で質問させたり、発表させたりする訓練は、大人数のクラスであったため一部しかできなかった。大教室のため、一部に居眠りする学生も見られて、問題点として残っている。一方、授業にできるだけ集中させるように本年度は配布資料に自分で書き込ませる工夫を行った。

改善方向としては、授業に意欲的に取り組ませる工夫、予習をさせる工夫などが必要である。大人数の授業では全体をコントロールすることが困難であり、この面でのノウハウの提供を得ることも必要である。さらに、TAを効果的に活用することも必要であろう。できるだけ、双方向性の講義や学生間の討論を試みる必要がある。

③共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」食の比較生化学ーヒトと動物ー

授業評価では、出席率は高く、大体意欲的に取り組んだ学生が多い。講義がよく準備されたこと、聞き取りやすかったこと、速度が適度であること、満足度が+以上が90%を占めたこと、総合判断で良い+非常に良いが100%であり、一定の評価を得た。しかし、意欲的に取り組んだ学生の割合が若干少ないこと、自習した学生が少ないことなどが問題点となるが、学生評価は大体いいように思われる。本年度の新たな取り組みとして、TAの大学院生に食と比較生化学に関連した研究内容を紹介させ、大学院の研究の一端を実感させるとともに、大学院生活の楽しさについても触れさせる試みを行った。

改善方向としては、学生の学習意欲を引き出すこと、予習する態度を持たせること、などが課題となる。また、基礎ゼミの趣旨を活かした、双方向性の授業にする工夫やTAを効果的に活用することが必要である。

④共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」ペット栄養から観るヒトの食と栄養代謝

授業評価では、出席率は高く、大体意欲的に取り組んだ学生が多い。講義がよく準備されたこと、聞き取りやすかったこと、速度が適度であること、満足度が+以上が87%を占めたこと、総合判断で良い+非常に良いが80%であり、平均的な評価であった。また、

意欲的に取り組んだ学生の割合が若干少ないこと、自習した学生が少ないことなどが問題点となるが、学生評価は大体いいように思われる。本年度の新たな取り組みとして、TAの大学院生に食と比較生化学に関連した研究内容を紹介させ、大学院の研究の一端を実感させるとともに、大学院生活の楽しさについても触れさせる試みを行った。

改善方向としては、学生の学習意欲を引き出すこと、予習する態度を持たせること、などが課題となる。また、基礎ゼミの趣旨を活かした、双方向性の授業にする工夫やTAを効果的に活用することが必要である。

(2) 海 野 道 郎

a. 教養教育院教授としての授業の狙いと取り組み

教養教育の目標は何か、という問いに対しては、さまざまな答えが可能であろう。そして、それはそれぞれ、一定の意味があるに違いない。しかし、一人の人間にできることは限られている。私は、教養教育院に配属された今年度の総長特命教授6名の一人として、他の5名の専門分野等の特性をも勘案し、担当授業全体に対して、次のような目標を設定した。

- ① 私自身が定年退職まで所属した文学研究科だけでなく、他の（いわゆる）文科系学部
の学問領域をも念頭において授業を行う。すなわち、社会の中で生きる意味と個々人の
行動の集積によって存在する社会のメカニズムに対する関心を喚起する。同じ社会
科学者である柳父圀近教授や工藤昭彦教授とは、問題関心を共有する部分は多いが、
方法において差異化を図る（政治思想史学者である柳父氏、農業経済学者である工藤
氏に対して、私は社会学・社会心理学領域における数理分析・計量分析を主な方法と
している）。
- ② 応用化学から社会工学を経て社会学に専門分野を移動した、という私自身の経験を積
極的に利用し、全学部の学生に対して、専門分野を超えた知的活動の共通性を伝える。
（この問題意識を踏まえたエッセイについては、たとえば、海野「いかなる道を歩も
うとも一学部時代の過ごし方―」『全学教育広報（曙光）』第26号、2008年10月刊を
参照）
- ③ 学生の発達段階を考慮し、高校教育までで培った考えを対象化し、自らの力で新たな
世界を切り拓くための、刺激や手がかりを与える。

授業に関しては、次のような工夫を行った。

- ① 講義科目においては、パワーポイントを用いるとともに、資料を配布し、学生が講義
内容の筆記に神経を使うことなく、「考える訓練」ができるように心がけた。
- ② また、演壇からの講義は最小に留め、学生の机の間を歩きながら講義の中でも頻繁に
問いを発し、学生とのインタラクションを心がけた。
- ③ 基礎ゼミにおいては、知的活動を自ら企画し実行する訓練を施すとともに、学生同士
の交流や学生個々人と教員との人格的交流を心がけた。ただし、授業の場ではTAを前

面に出し、学生と TA との直接的相互作用を通して、上記の目標を達成しようとした。

- ④ 総合科目においても、ワークショップ形式を取り入れ、受講生が小集団を形成し積極的に情報収集から整理・分析・報告に至る一連の知的生産過程を体験させるよう心がけた。ここでも、TA をフル活用した。

b. 各授業の実施状況

①基幹科目 「社会の構造」社会の成り立ち：ミクロレベルのメカニズム

1 セメに 2 コマ実施した標記の授業は、基本的に同じ内容の講義を行った。ただし、例示の題材などは、受講生の学部をも考慮して選択した。

この講義は、基本的に、人間個人はどのように意思決定をしているか（「個人的意思決定の問題」）という社会科学の基本問題について、規範科学・経験科学の両面から考察するものである。

この問題に関しては、近い過去に「大学受験」という意思決定を経験し、近い将来に「就職や進学」などの意思決定を控えている学生にとって身近な問題でもある。講義においては、部やサークルの選択、同性・異性の友人の選択、など学生にとって身近で重要なこれらの選択も意思決定である、という事実を想起させつつ、そのような多くの意思決定が持つ共通の法則について、合理性と合理性を超えた特徴を、教室内でのミニ調査とその結果のフィードバックをも交えながら、解説した。

評価にあたっては、最終レポートおよび途中でを行ったミニテストやミニットペーパー、中間レポートからの情報を総合した。なお、最終レポート中の優秀作品については、授業内で報告会を開催し、学生の努力に報いるとともに、一般の学生に対して知的刺激を与えた。

今年度は、授業のテーマごとに小レポート（と称する中間レポート）の提出を奨励し、その小レポートに対しては、担当者がコメントを付して返却した。学生には、提出した小レポートの中から一つを選び、担当者のコメントを踏まえた改善・拡充を行って最終レポートを作成・提出することを求めた。

レポートが満たすべき形式と内容については、授業当初に資料を配布して説明し、中間レポートの後にも改めて注意を喚起したが、最終レポートに至っても指定した条件を満たさないものが散見された。また、レポートの枚数についての質問に「必要十分な量」と答えたところ、A4 判 1 頁程度のものが少なからず見受けられた。このようなレポートは、必然的に内容も貧弱であり、学生と教師との間に期待水準の齟齬があることを確認する結果となった。ただ、先年まで見られた WEB 上の情報の貼り付けや学術論文の盗用は、それを厳しく注意喚起したためか、見当たらなかった。いずれにせよ、レポート作成の基本事項は、個別の科目を超えて、大学全体として克服すべき問題だと考えられる。図書館が発行している『東北大学生のための情報探索の基礎知識（基本編）』には、かなりの確かな記述があるが、十分な活用がなされていないように思われる。このような、専門の如何を問わず必要とされる基礎的なマナーや技術については、大学全体として検討し取り組む必

要があろう。

なお、昨年度は、同一科目は1科目しか履修できないという制度上の制約を踏まえて1コマで完結するように内容を組み立てたが、今年度は、その制約が緩和されたため、前期と後期は、関連する別の講義を行い、継続履修を期待した。このように、昨年度に1学期間で行った内容を2つの学期に分割したので、授業方法についても改善を試みた。すなわち、一つのサブテーマに2コマを割り当て、1コマ目は問いを提示してそれをめぐる討論を行い、2コマ目に討論を踏まえて総括的な講義を行う、という形式を原則とした。そのため、前年に比べて、討論を中心とした学生とのコミュニケーションも、かなりの程度、達成できたものと考えている。

②基幹科目 「社会の構造」社会の成り立ち：マクロレベルのメカニズム

この講義は、基本的に、人間の個人的意思決定の集積によって構成される社会現象という社会科学の基礎をなす基本問題について、規範科学・経験科学の両面から考察するものである。

この2セメの講義は、「個人的意思決定の問題」に関する1セメの講義を踏まえて、社会現象の生起メカニズムについて取り上げた。とくに、人々の行う行為の意図に反して生じる「意図せざる結果」や、複数の行為者が個々人は合理的な選択をしても（するゆえに）非合理的な社会的結果が生じる「社会的ジレンマ」のメカニズムなどを、現代社会が孕む重要な社会問題である環境問題等の基底をなすものとして解説した。さらに、複数の個人の意見をどのように集合的意思決定に統合するか、という社会的意思決定の問題についても問題提起と解説を行った。

評価については、1セメと同様の方法を採用したので、重複は避ける。必要に応じて、「①基幹科目 「社会の構造」社会の成り立ち：ミクロレベルのメカニズム」中の該当部分を参照いただきたい。

③共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 事実を探る－情報と現実の間－

現代社会が孕む諸問題についての感覚を養い、学生各自の（将来の）専門からの問題解決のモチベーションとなることを目指した。まず、佐高信『現代を読む－100冊のノンフィクション－』（岩波新書）を読んで、そこに紹介されている書物から興味深いものを3冊選んでもらい、集計した。それによって、ゼミ生の関心の広がりや重なりを把握するとともに、各自が1冊ずつ読んで報告し、課題を共有した。さらに、各受講者が選定した文学作品を読み、そこに描かれている社会の事実を文章にまとめて紹介するとともに、集団討議を行い、現代社会の諸相を学んだ。また、このような活動を支えるための基礎技術（情報探索や作文技術）を学んだ。

③共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 人と社会－未知の世界を拓く－

（イ）小説を読んで、その中に描かれる社会状況を通して社会に対する理解を深めると

ともに、(ロ) 教員が紹介する 3 名の大人（佛教の僧侶、キリスト教の牧師、環境問題の市民運動家）に教員とともに会いに行き、話を聞き、さらに、(ハ) 自分が関心を抱く人を探し出して、その人とのインタビュー記録を作る、という課題を遂行した。盛りだくさんの内容だったが、自己のアイデンティティを確立しようとする学生の発達段階にもマッチし好評だった。

④展開科目（総合科学（総合科目）） 「社会的決定を報道に探る」

第 1 段階では、授業担当者と TA が、社会的決定の理論についての講義、および研究の方法に関する講義を重点的に行い、併せて、研究対象とする社会的決定について集約し、研究班編成を行った。回を進めるに連れて、講義の比重を減らし、班活動に用いる時間を次第に増やした。

各回の授業の最後には、必ず現状報告と問題提起を要求し、受講者全員が問題を共有するとともに、他の研究班メンバーからの質問や意見によって、研究が深まることを意図した。各班は、それぞれ、「安楽死問題」、「死刑制度問題」、「尖閣諸島をめぐる問題」、「オリンピック開催地決定問題」について、書物、新聞から知識を得、班内の討論と他の班メンバーからの質問によって問題を深め、最終報告書を作成するとともに、授業内で報告会を行った。

⑤展開科目（総合科学（総合科目）） 「社会的ジレンマ：一環境問題の基本メカニズム」

環境問題の基本メカニズムである社会的ジレンマについて、授業担当者が記した関連文献を読んで社会的ジレンマ分析の基本的方法を理解するとともに、受講者が選んだ任意の環境問題について調査・分析を行い、報告を行った。今回の受講者は高校生のみ 4 名だったので、高校生同士の相談によって「自転車駐輪問題」を選び、文献によって問題の所在を明らかにするとともに、仙台市の一番町商店街で通行人対象の調査を行った。また、受講者が所属する宮城県第一高等学校の生徒を対象とした調査も、併せて行った。

この受講は、当初の予定通り「ゼミ形式」でおこない、受講生も熱心に応じてくれたが、高校生は可処分時間が少ないために、授業時間外に多くを期待するのは困難であった。

c. 学生授業評価とその評価に基づく改善

①基幹科目 「社会の構造」 個人的決定と社会

授業中に私語する学生はおらず、授業は成立していた。しかし、評価については、基幹科目の平均と比べて全般的に高い授業もあれば全般的に低い授業もあった。基本的に同じ内容で行っている授業に対してこのように異なった評価が得られる事実に対しては、検討が必要であろう。手始めに、他の教員でも同じような現象が生じているのか、科目の性質と受講生の学部と間に関係はあるのか、同一内容の講義を複数回行う場合に一般的傾向があるのか（後の授業の方が先の授業の反省を踏まえて行うので良い授業ができる、とも考えられるし、逆に、同じ内容の授業を複数回行う際に、後の回ほど、慣れることによって

教員が熱意を込めにくくなるのか) などについて検討が必要である。

また、同じ授業についても、学生による評価の分散が見られた。たとえば、第2セメスター（月4）の授業に対して、「非常に大学らしいというか濃い内容だったと思います」、「物事を考える力がついたと思います」などの肯定的評価がある一方で、「一言でいうと、最低な授業であった。内容に興味があり、この授業を受けたのに、全く面白くなかった。」という否定的評価をした学生もいた。一部の学生との間に、「学生の要求（想定）と教員の想定との食い違いがあった」ことに起因するものと推察される。

- (1) 学生はシラバスどおりの授業を基準とし、それに厳密に従うことを要求していたようである。それに対して教員は、シラバスはあくまでも一つの目安であって、学生の反応を踏まえながら臨機応変に変えるべきものと考えていた。
- (2) テキストの位置づけについても食い違いがあった。教員は学生に対してテキストを予習してくることを要求し、それを前提にして話を展開した。しかし、学生の多くは、テキストの内容を教員が噛み砕いて説明し、その場で理解できるようにすることを期待していたようである。
- (3) ちなみに、上に記した教員の考えや方法は、数年前まで担当していた文学部においては、うまく機能していたものであった。そこで、今年度は、大学における授業の性格や私の意図を第1回目の授業（オリエンテーション）で学生に理解させることを心がけたが、それが十分でなかった。中には、このオリエンテーションに出席せず、また、第1回授業で配布したシラバスを入手せずに受講した学生もいたことであろう。そのような学生の評価に対してどのように教員側が評価を下すかは、今後の研究課題である。
- (4) 昨年度は、一昨年度に1年間かけて行っていた内容を半期に圧縮して行ったが、その結果、「interactive」な授業を心がけたにも関わらず、一方的な講義が多くなり、結果的に授業内で十分に理解させることができなかった、と総括した。そこで今年度は、内容を再び1年間で履修するようにした。それによって、一つのテーマに2コマを充当し、討論を主とする回と理論的まとめと展開をする回を設けた。このため、授業で扱ったトピックの数は少なくならざるを得なかった。
- (5) 大学の授業は、本来、教室内で完結するものではないと考えるが、授業時間中に理解させる努力をもおこなうべきであろう。

②共通科目（転換・少人数科目）

「基礎ゼミ」 事実を探るールポルタージュに見る社会ー

学生には、知的生産の基礎技術を訓練するとともに、毎回のように課題を出して、その結果を踏まえた小集団討論を頻繁に行った。教員およびTAは、多くの準備をかけたが、学生による評価は必ずしも高くはなかった。ゼミ当日はTAを押し立て教員は準備段階に重点を置くとともに、学生の自主的活動を期待する、という運営方法が、結果的に、「放置した」、「熱意がない」と受け取られたようである。学生の自主性を尊重しつつも、満足

度の高い授業は何かを、さらに追求したい。「他学部と交流でき、自分の意見を深めることができた。作業の要領を得ることもできた」、「本を読むのが楽しくなりました」、「レポートの書き方とかはよくわかりました。」などというコメントもあった。

③共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 人と社会—未知の世界を拓く—

こちらの基礎ゼミに対する評価は、「事実を探る」よりも全般的に高い傾向がある。しかし、多大な労力をかけたにも関わらず、予想したほどの高評価は得られなかった。多くの課題を課したのも一因と思われる。実際、「少し内容を詰め込みすぎた気がします」という自由記述があった。他方、「大学で学ぶということはどういうことなのか、ということがとてもよくわかる授業だった。1セメスターの授業の中で、一番自分の頭で考え、主体的に動くことができた。すばらしいきっかけをたくさん与えていただいたので、これからは自分の力でそれらをもっと広げて行こうと思っている」という評価を受けた。このような評価を受講生全員から受けられるよう、さらに努力を傾注したい。

④展開科目（総合科学（総合科目）） 「社会的決定を報道に見る」

ほとんどの学生が、毎回、熱心に参加した。しかし、学生の時間割の関係で、ゼミ時間以外に集まって相談することは、なかなか難しいようである。評価は、すべての項目で全体平均、委員会平均よりの高かった。特に、「A2 質問」、「A3 関連学習」については、大幅に高かった。「思ったよりもやることが多く大変だった」、「今までしてこなかったような試行錯誤をする機会が得られ良い経験になった」など、概ね好意的な評価が得られた。

⑤展開科目（総合科学（総合科目）） 「社会的ジレンマ：一環境問題の基本メカニズム」

昨年度の同一科目については、否定的評価をする学生が 1 人いたが、他からは概ね好意的に受け取られた。しかし、今年度は、東北大生の受講者はゼロであり、宮城第一高校の学生 4 名だけだった。そこで、受講生が高校生であることも考慮して、講義の部分を多くした。また、討論や野外調査（インタビュー）もおこなった。受講者は少人数の高校生だけだったが、非常に熱心に受講した。

教養教育院発足後の 3 年間を、総長特命教授として教養教育に携わってきた。特命教授の任期（2 年＋1 年）を全うしての退職することになる。反省すべき点は多々あるが、私自身が東北大学の授業の中で改善することは叶わない。後継の総長特命教授諸氏が、あるいは広く教養教育に携わる教員の（手本ではなく）参考になれば幸いである。

(3) 海老澤 丕道

a. 教養教育院教授としての授業の狙いと取り組み

教養教育は「人間がよりよく生きていくために必要とされる知性と知識、及びそれらを

自ら探究しようとする思考力・技量・行動力を身につけ、責任ある市民になるため」を目的として専門教育と対照的に考えられている。また、教養教育院には特命教授の研究上の知識と経験を生かしたモチベーションを高める授業科目と授業運営が求められている。

最先端の研究上の知識や研究のすばらしさを伝える内容を幅広く組み立てることが一つの理想である。が、それは複数の教員で今後計画的に準備することを東北大学としてあるいは教養教育院として考えて行くべきであるとして、現在単独でできる範囲で授業の狙いを次のように定めた。

- ① 知識と経験を生かして随所に教員の研究に対する見識の披瀝を行い学生に研究についての意識を育てる
- ② 学生への語りかけと対話を通じてまた学生の主体的な学びの態度をとらせるようにして、学問や研究に対して各学生が個性的に考える態度を身につけさせ、その能力を伸ばす
- ③ 学問の系統性・古典から現代への進歩と研究の意味などを理解させ各自の学びの姿勢に生かす気持ちを育てる
- ④ 何を知るべきか、何を為すべきか、といった科学の永遠の課題にそれぞれに立ち向かう力を育てる

このため、次のような内容で複数の科目を企画した。

A. 物理学そのものについて

- ① 研究してきた立場から、なぜ物理学がおもしろいか、どのような学問なのか、どのようにしてその学問として成り立ってきたのか、これからどう研究していくのかについて学生に示す
- ② 高校で物理を学んでは来なかった学生に対して、物理現象に興味があるならば短時間で物理学の考え方、体系や諸学問の中での役割を把握できるようにする
- ③ 学んできた学生に対して、高校ではあまり扱わない身の回りの物理現象をとりあげて親しみを感じさせ、また自発的に考えるよう仕向ける一方で、高校ではあまり詳しく触れられない現代の物理学の考え方、これからの物理学の目指しているもの、などを「おはなし」として理解させ、それにより各人がそれぞれに学業への動機付けを得る機会を与える

B. 科学の発展に関して

- ④ 人類が知識や能力を獲得してきた研究の活動のすばらしさを伝え、学生が自らなすべきことについて考えさせる
- ⑤ 科学の研究がもつ人間的社会的な意味を考えさせる

C. ゼミとして

- ⑥ 自ら学び課題を探し他の学生とのコミュニケーション、協力、発表や討論を経験させ、能力を高める
- ⑦ 創造的とはどのようなことか、具体例について考えさせる

b. 各授業の実施状況

①基幹科目（自然論） 「自然界の構造」 おはなし物理学

当初、高校で物理を学ばなかった学生を想定して、授業の目標をまず物理学そのものの理解に置いた。通常の高校物理・大学の基礎課程で学ぶ物理学から題材を精選し、日常の経験や簡単に実験できることを基にして、現象を把握し法則をみつけて本質を理解することを話すことにした。しかし、高校で学んだ学生（既習者）の関心が集まってきたことを踏まえて、物理法則の本質の理解を深め自ら考える力を養う内容を盛り込むことにした。内容と進度を学生に適したものにするため未習者向けと既習者向けを別のクラスとし、前期に未習者向け 1 クラス、後期に未習者向け 1 クラスと既習者向け 2 クラスの授業を行った。

パワーポイントを用いて説明し、スライドの内容すべてを縮刷してハンドアウトを配付した。力学おもちゃ、デモ実験、アニメーション映像を用いて授業が単調にならないよう興味を引くようにした。練習問題を与え、また、物理学では考え方を重視することを実感させる方法としてクイズを出し、答をレポートとして毎回授業の最後に書かせ提出してもらった。次週に解答例を示して理解を深めるようにした。

特記すべき点を挙げる：

- i. 1 セメスターの未習者向けクラスでは科目の目的をおよそ達成することができた。これは過去 2 年間実施しての反省に基づく改良の成果である。
- ii. 後期の未習者向けクラスでは受講者数が前期の 4 倍に当たる 340 人を超え、C200 教室に入りきらなかった。特に、既習者である工学部学生が 130 人程度受講したことが前年度と大きく異なる。学科による時間割の違いで既習クラスを受講しにくい場合があったなど事情があったようだが、やはり教育効果の点で問題があった。
- iii. 2 セメスターの 2 つの既習者クラスでは、高校物理の範囲と現代物理学の両方を扱うことを試みたが、これらの時間配分について、また身近な例を取り入れる工夫について、未だ課題を残した。クラスのサイズは 180 人、90 人であり、特に不都合はなかったが、一部未習者にとってはハードルが高かったようである。
- iv. 毎回のクイズ回答をレポートとした提出物の整理を、後期の多人数クラスでそれぞれ 1 名の TA に手伝わせた。解答の傾向や陥りやすい間違いの抽出、優れた回答と思われるレポートの抽出などで成果があったが、TA 学生の負担は大きかったようである。
- v. 昨年度に引き続き、TA 学生がプログラミングを担当して物理系シミュレーションとその可視化によるデモアニメーションを用意した。これは教材として優れた効果をあげている。
- vi. この科目には学生の成績評価のため計算問題が解けるかどうかの試験をすることは適さない。代わりに「ミニレポート作成」形式のアンケートを試験の位置付けで実施した。課題を、各学生自身の履修目的とそれに基づく授業のテーマ・練習問題やクイズについての意見や評価としたところ、ほとんどの学生から丁寧な記

述のレポートが得られた。

- vii. ミニレポートの記述から、物理学の考え方の理解が深まった、自分で考える力が伸びたなど、目標がある程度達成されていることがうかがえた。
- viii. 他方で、授業が分かり易かった、楽しかったという反応に止まり、授業で受け身に終始した学生が多かったかもしれない。
- ix. 成績は毎回のレポートと最終ミニレポートの内容をシラバスに示した授業目的に照らして採点し、評価した。欠席がちな学生の多くは試験に欠席し、不合格となった。

②展開科目（総合科学（総合科目））

「科学と人間」 人はなぜ科学をするか、科学は人に何をもたらすか：物理学の場合
科学史をたどりながら研究の意義や面白さや光と影などを伝えようとするならこの科目を基幹の一つとする考え方もあろう。しかし、全くの歴史ではないので社会論には入らない。科学者とその考えに注目するが人間論でもない。科学研究の内容ではないので自然論ではない。内容に合うよう科目名をたてることが適当だが、それは制度上、総合科目群・カレントトピックス科目群においてのみ可能であることから、これを総合科目とし、併せて実施内容も総合科目らしく整えた。

天文学、哲学、物理学、生物学といった学問における人間の知識と思索や自然観などに注目して、優れた科学者の言葉や考えと業績について講義した。ただし、科学史や科学哲学を意識はするがそれにとらわれず、むしろ学生に考えさせ参加させる性格を持たせた。具体的には、各講義の最後の20分ほどの時間をとり、講義や配付資料について考えるところをコメントシートにまとめて提出させた。学生からの口頭での意見発表や討論の機会を狙ったが、学生が積極的でなかったため、筆記による意見交換、つまり講義の冒頭でこちらから「前回の皆さんからのコメント」として紹介することで代用した。

特記すべき点を挙げる：

- i. 学生からのコメントには、各学生がそれぞれの力を伸ばせるようにこちらのコメントやアドバイスをつけて返す一方で、次週の講義の前に学生コメントの概略の紹介や質問への回答を行った。これによって、個々の学生が捉え得た多様な視点をクラスで共有するとともに、個々の学生のその人らしい考察を引き出し得ていたように思う。
- ii. 毎回のコメントの集大成として、具体的なテーマを各自で選んだ上でレポートにまとめさせた。中間レポートを提出させ、修正意見をつけて返した。これにより、学生により程度の違いはあるが、レポートを書く力を伸ばすことになったものと考ええる。
- iii. 理学部と工学部の履修学生が多いことは予想通りであったが、文系学生も多く、特に文学部学生の割合が高い。歴史をたどる内容であるため文学部の学生に興味を持たれたのではないか。しかし、そのため理系学生への専門的な説明にあまり

踏み込めなかった。

- iv. 工学部・農学部などの学生に対して科学・技術の役割を考えさせ、学生の学びのモチベーションに結びつける効果があった。
- v. 1 セメのクラスでは、仙台圏大学間連携遠隔授業システムのコンテンツ作成試行ケースとして講義全ての収録が行われ、協力した。おおむね成功した。ただしこの授業は学生参加型の性格を持つので、一般の授業に較べて講義が占める割合が内容的にも時間的にも少ないことで適合性を懸念している。
- vi. 高大連携事業による高校生の履修があった。後期の1クラスで6人が履修し、熱心に積極的に参加したことにより、クラス全体に良い影響があった。

③共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 「ゆらぎ」を科学する

「ゆらぎ」の概念について講義で概略の説明を行い、分析するための数理的方法の基礎を演習で理解させたのち、グループを作ってそれぞれに対象を定めてその「ゆらぎ」の計量的把握、分析と考察を進めさせた。その過程で各自の興味と分析・考察を互いに発表しあい、討論する力を育てることを目指した。またグループでの共同作業により協力と分担について体験させた。

学生の選んだテーマは、「音」、「学習」、「センター入試の平均点」、「生活の中」、「自然の中」などにおけるそれぞれのゆらぎについての分析や、人の関わり方についての考察である。熱心なグループではそれなりのレベルまで到達したが、不熱心な学生に対しては有効な激励策が見つけられなかった。基礎ゼミ形式の限界はあろう。

このテーマにおける研修は2時限を続いて使えることが望ましく、隔週で実施した。空いた週がグループごとのデータ集めの機会になったようである。

④共通科目（転換・少人数科目）

「基礎ゼミ」 創造的な研究とは：ノーベル物理学賞に学ぶ

ノーベル物理学賞を与えられた研究者とその研究を取り上げて、調べたことに考察を加えて発表するものである。はじめの1回に導入の講義をする他は、ほとんど全て学生の自主性に任せ、教員は参考書の用意と、発表の時に質問やアドバイスをするだけとした。受賞記録一覧からテーマを各自選び、それに基づいて全員を6グループに分けて、調査・考察・発表をグループ単位で行った。第2回と第3回を準備の意見交換とし、第4回～第15回を各2グループずつ、中間発表と最終発表に宛てた。

グループにより様々な形式での考察や発表ができたが、およそ、受賞内容よりも研究の背景となる基礎の部分への興味を抱いたり、調査によって知識を得たりした効果、また受賞の背景やいきさつの調査などから、研究の創造性や未開拓分野志向といった研究のモチベーションについて考える機会となったこと、などが成果としてあげられる。

教員の専門分野（物性論）では分野的に偏るため、原子核物理学専攻の博士課程学生1名をTAとして学生へのアドバイスや質問を補助させて、効果があった。

c. 学生授業評価とその評価に基づく改善

①基幹科目（自然論） 「自然界の構造」 おはなし物理学

合計 4 クラス実施したが、高校の物理未習者向けと既習者向けで内容的な違いと、履修者の意識の違いがあるので、以下では区別して述べる。

高校物理未習者向けクラスは 1 セメと 2 セメに各 1 クラスで実施した。同じ内容だが、1 セメクラスの方で評価が高く、「満足できる科目だ」、「総合的に非常によい」、を選択した人数比率が基幹科目平均よりいづれもパーセント値で 8 ポイント高いのに対して、2 セメクラスでは「満足」で 12 ポイント低く、「総合的に」で 8 ポイント低い。授業の進めかたに関して、理解しやすさと進める速さについての評価は、1 セメでは基幹科目平均と同程度であって科目の性質を考えれば特に問題がないと思われるのに対して、2 セメでは難しい、速いと受けとられている。

2 セメクラスで評価が低い理由は、授業で扱う科目内容、授業の狙いや進め方ではない。2 クラスとも高い評価を得ているのが、視聴覚利用についてであり、TA が準備した動画の有効性も TA の高評価につながっていることから判断できる。違いの理由の一つには実施方法、もう一つには履修学生の期待と授業内容とのミスマッチ、にあると考えている。以下、そう考える理由と改善策について述べる。

これら 2 つのクラスの違いは表面的には 4 点ある。(1) 人数の違い。1 セメで 85 名、2 セメ 376 名（ただし途中で履修を止めた学生も多く、授業評価の際に出席した人数は 317 名）である。(2) 教室の違い。1 セメでは B 棟の階段教室で、2 セメでは C200 番教室である。(3) 1 セメでは未習者がほぼ全員であったが 2 セメで時間割枠としては対象学部となった工学部学生が 35 パーセントを超し、物理既習者の多い環境を作ってしまった。(4) 履修の動機として際立つことは 1 セメでは「勧められたから」が基幹科目平均を下回り（3 分の 2 程度）、「単位が欲しいから」も平均の半分にも満たないのに対し、2 セメでは「勧められた」が平均の 2 倍近く、単位が欲しいからが基幹科目平均と同程度であり、大きな違いを見せている。

自由記述にあらわれた 2 セメクラスの物理未習の学生からの不満として、人数が多くて教室が過密であり、それは理系学生がいるせいだ、また理系学生がいるため未習者への説明がなおざりになる、理系学生の履修態度が不真面目、未習者には余り理解できなかった授業だ、文系には難しい内容だったのでは、など具体的なものが寄せられている。

したがって、1 セメクラスで得られたような満足度を 2 セメクラスでも生み出すためには、履修人数が減る、このクラスには物理既習者が入らない、履修理由として自発的な動機を持った学生が受講する、などを結果させる方策をとらなければならない。このため次年度には、時間割上でこの科目の 2 セメ月曜第 3 校時クラス対象学部から工学部を明確に外した。工学部の学科によっては既習者向けのクラスをとり難くなるかもしれないが、あえてそのようにした。その上で、誰かの勧めに従ってではなく自分の履修目的をもつよう授業内で訴えること、授業を進める速さに留意し、集中して聴講した結果が形で現れる

ような Quiz の出題を心がけることとする。

既習者向けの 2 クラスからの評価にも、同じ授業内容であるのに若干異なった結果が得られている。つまり、火曜クラスで全般的評価がよく、満足度も総合評価も平均より高いのに、木曜クラスではいずれもわずかに低い。説明のわかりやすさと、総合的な理解度についても同じ特徴が見られた。これは単なるゆらぎの結果ではなく、上に述べたような人数・教室・履修動機と相関のある評価結果となっていることは興味深い。つまり、評価がいずれも低い方のクラスが、履修人数が倍、教室が大きい(C200 番)、履修動機に「勧められた」をあげる率が目立つ、という特徴がある。その他には、火曜クラスで理学部学生が 3 分の 2 であり木曜クラスの方では工学部学生が 4 分の 3 を占めるという物理学に対する意識の差があるかもしれない。

改善に結びつけるべき低評価の理由を特定することは難しい。授業の進め方について、スライドなどの利用やプリント、また動画の活用についてはいずれのクラスでも評価が高く、いまのやり方を続けるつもりである。速さについて不適切とする人の割合が平均よりも高いという共通の傾向があり、授業の中で理解度を把握しながら進む必要があろう。授業で取り扱う対象や重点の置き方については、まだまだ改善の余地があると考えている。授業評価の結果からは有効なヒントが得られないので、毎回の授業の後提出されるレポートや試験にみられる感想や意見を基に考えてみる。

昨年の報告にも記したが、評価が特に高くない理由の推測として、授業内容の 2 本柱である高校物理と現代物理学の配置が企画として確立していないこと、実施内容としてぶれがあることが影響していることは今年も言えよう。履修する学生にもおそらくおはなしの楽しさ豊かさに期待した人たちと、高度な内容の分かりやすい話を期待した人たちの二通りがあったのではないかと考えている。履修を選択した主な理由が「内容が面白そう」の 3 分の 1 あまりに次いで「単位が欲しいから」の約 3 割が目立ち、履修する学生に消極的な傾向がかなりあると考えられる。楽しく授業をうけて、単位がもらえるならば基幹科目として最高だと考えがちな学生に、物理学の本当の意味や役割を考えさせ、考えることの楽しさに気づかせることが目的であったはずなのにまだ不十分だと言わざるを得ない。理系の学生に対しては物理学を教えて知識を増やすよりは、物理学の意味を伝えることにより学生達が気づくことに期待したい。具体的には、学生達が望むように、身近に起こる現象や物の背後にある法則を考え、またそれによる予測をより多く取りあつかうことも一つである。

②展開科目（総合科学（総合科目））

「科学と人間」 人はなぜ科学をするか、科学は人に何をもたらすか：物理学の場合

1 セメスターで 1 クラス、2 セメスターで 2 クラスの授業を行ったが、このうちで 1 セメスターのクラスで最も高い評価が出ている。ただし、評価アンケート提出者が 7 名という少数であることから、一つには熱心な受講者ばかりだったこと、一つには否定的な回答がしにくい状況ということを考慮しなければならない。このクラスの回答をまとめると、

「よく準備されていて進む速度は必ずしも適当ではないが説明は理解しやすく、教員の熱意も感じられ、総合的に良い授業だった」となる。総合判断で 5 が半数を超え、全て肯定的な評価であって、満足度も高かった。スライドの文字が小さい場合が多かったと思うが「読みやすい」が 100%であったことは注目され、「説明が理解しやすかった」と関連しているようだ。

2 セメスターのクラスの回答は、2 つのクラスで若干異なる特徴を持つ。履修人数はこの 2 クラスで同程度なのでその違いの理由にはならないと思われる。単位取得者数で一方は 23 名他方は 30 名である。通常の傾向とは逆に、より多人数だったクラスで総合科目平均よりも総合的な評価点は高く、少人数だったクラスでは若干低い。詳細に見ると、より多人数だったクラスで「総合的によい」とする「5」評価者の割合が、総合科目平均よりも 10 ポイント高い。これに比べてより少人数だったクラスでは「4」評価の人数割合が高く「5」評価が低い。この理由は把握できていない。個別項目では、教員の熱意、文字数式の見やすさやプロジェクター利用などについての評価が高く、総合評価がそれほど高くないこととは反する。後者の原因が、評価の低かった「進み方の速度」「説明のわかりやすさ」によるものであるならば、クラスの学生の反応を見ながら対応する姿勢が足りないと言うべきかもしれない。関連して、「総合科目」平均よりも評価が低い項目として「履修者のこの科目の理解度」が目につく。3 クラスともに共通に低い。

全学教育共通のアンケートとは別に、最終回に自由記述で感想や授業改善意見などを書かせている。これを読むと、毎回求められるコメントに書くことがないと悩んだ学生がいたり、逆に書きたいのに十分な時間的な枠が確保されていないと訴えたり、必ずしも科学者の業績について理解できなかった学生がいたり、自然界の構造：おはなし物理学で楽しんだ動画や図と比較して文字ばかりのスライドの多いことを指摘する学生がいたり、など、問題点は分かってくる。科目で意図する意義を理解して楽しんだ学生だけではない。改善としては、もう少しヒントを与える、考える時間を確保する、図版を増やす、説明を工夫する、などが考えられる。また、現代の科学と人間の関わりを取り上げることも、必要であろう。

③ 共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 「ゆらぎ」を科学する

学生による評価と教員からの観察を総合してみると、「テーマ名が何となく興味を引いたので選んだが」「担当教員の準備が万全でなく、整理が十分でない」中で「理解も必ずしも十分にはできなかった」が、結果として「ある程度意義のある授業となり」「不満はないし、結果的にはそう悪くない授業だった」、といえよう。この特徴は前年とほぼ同じである。

基礎ゼミの平均値よりも「5」の人数割合が低く、「4」の割合が高い項目がみられる授業内容・方法評価に関しては、導入部の講義の部分の問題点を指していよう。これは、ゆらぎの概念、数学的手続きのいずれについても講義による理解が難しいことを感じてしまったからと思われる。講義の部分に工夫が必要かも知れない。

履修の理由で「内容が面白そう」をあげている率が基礎ゼミ平均をかなり上回る。これを見越して、受講に期待することを語ってもらうステップを設けた。これは有効であり、さらに前年の学生の選んだ問題を紹介することにより、キックオフを助けるイントロダクションになったと思う。これは次年度に活かしたい。

評価には現れていないが、到達したレベルがグループによって違った。学生の力量や時間のかけ方や熱意によるとはいえ、進め方により改善するとすれば、中間発表を早めに行えるような全体計画にすべきであろう。

③共通科目（転換・少人数科目）

「基礎ゼミ」 創造的な研究とは：ノーベル物理学賞に学ぶ

総合的な評価は、「基礎ゼミ」の平均的なところに落ち着いている。肯定的な満足感は、それぞれが努力した達成感によるものであろう。何よりも、学生自身の自己評価項目、自習と授業時間以外の学習の評価値が「基礎ゼミ」平均値にくらべ並外れて高いことが、いかに学生達が自主的な努力を惜しまなかったかを示している。教員の裏に回った努力はあまり評価されず、平均に比べて熱意が認められなかったものであろう。結論としてゼミの目標は良く達成されたと考えられる。総合的にも若干基礎ゼミ平均を上回るので、細かな問題点を改善するようにして次年度も続けることにしている。TA の活躍の評価は、TA の専門が原子核物理であることと、学生達の選んだテーマが素粒子や宇宙などであって教員の専門（物性物理学）から遠く TA の専門に近いことにより、実際に TA の貢献が大きかったことを示していると考えられる。この TA には次年度も参加してもらう。

履修の理由で「内容が面白そう」をあげている人数割合が平均をかなり上回る。こういう場合は、学生にそれぞれがゼミに期待することを初めに語ってもらうステップを設けるとよい。各自のテーマの動機として活かされるからである。今回は、興味の対象を皆の前で言うだけに留まったので、今後はもっと踏み込ませたい。

調べるテーマが偏ることが問題であった。もっと教員の手の届くテーマでおもしろそうに紹介するなど、興味の対象が広がるように、準備に手をかけたい。

自発的に調べ、まとめ、発表するタイプのゼミでは、教員の役割が学生から認識できない可能性がある。教員は科目の枠組みをしっかりと維持して、学生のモチベーションを保たせるために発表者の努力や工夫への評価や、手抜きやごまかしへの厳しい指摘を心がけることが重要であろう。また討論を活発にさせることを心がけているが、技術的に更に工夫が必要である。

(4) 森 田 康 夫

a. 教養教育院教授としての授業の狙いと取り組み

(第1セメスター)

①基幹科目（自然論） 「科学と情報」 数学と人間 ― 数学を俯瞰する

文明の成立と共に数学（算数）が成立し、デカルトやニュートンの研究により「科学を語る言葉」としての数学の役割が確定し、さらに最近では画像診断や通信などで数学の新しい応用が行われている。このような数学発展の歴史と最近の数学の問題を紹介し、数学や科学は長い時間をかけて発展し、その結果私たちの豊かな生活があることを示すことを目標とした。

②展開科目（総合科学（総合科目）） 「教育と科学技術」

「科学技術」と言う言葉は何を意味するかから始め、今の世界に科学技術がどのように役立っているか、それを支える人材を育成する日本の教育はどうなっているかなどを、SLA 2 人の協力を得て、受講者と一緒に考えた。

③共通科目（転換・少人数科目）

「基礎ゼミ」 学校教育の在り方と入学試験の功罪を考える

入学試験を受けて入学したばかりの学生に、自分たちが受けた高校学校教育の功罪を振り返って貰い、これからの大学教育を受けるための基礎認識として貰うことを目指した。またこれを通して、自分を囲む環境を客観的に見て、自分の意見を説得力を持って発言する訓練を目指した。

（第 2 セメスター）

①基幹科目（自然論） 「科学と情報」 数学と人間 ― 数学を俯瞰する

第 1 セメスターの「科学と情報」の授業と同様に、数学発展の歴史と最近の数学の問題を紹介し、数学や科学は長い時間をかけて発展し、その結果私たちの豊かな生活があることを示すことを目標とした。

②展開科目（総合科学（総合科目）） 「教育と科学技術」

「科学技術」と言う言葉は何を意味するかから始め、今の世界に科学技術がどのように役立っているか、それを支える人材を育成する日本の教育はどうなっているかなどを学生と一緒に考えることとし、最後にディベートを行うなど「対話型」の授業を行った。

③展開科目（総合科学（総合科目））「大学の社会的機能」

高等教育センターの羽田貴史教授、串本剛講師とで高年次を対象とした授業の開発を目指し、4 セメの学生を対象として開講した。

b. 各授業の実施状況

（第 1 セメスター）

①基幹科目（自然論） 「科学と情報」 数学と人間 ― 数学を俯瞰する

文明の誕生と数学の成立から始め、ポアンカレ予想の解決まで、ほぼ現在の数学全体

について解説し、数学の特徴と数学の役割について話した。

②展開科目（総合科目） 「教育と科学技術」

SLA 2 人が非常に熱心に働いてくれ、最後に行ったグループ発表も含めて充実した授業ができた。

③共通科目（転換・少人数科目）

「基礎ゼミ」 学校教育の在り方と入学試験の功罪を考える

自分たちが受けてきたばかりの入学試験という分かりやすいテーマだったので、自分の経験を交えて発表するなど、活発な授業が行われた。

（第 2 セメスター）

①基幹科目（自然論） 「科学と情報」 数学と人間 — 数学を俯瞰する

文明の誕生と数学の成立から始め、ポアンカレ予想の解決まで、ほぼ現在の数学全体について解説し、数学の特徴と数学の役割について話した。理系の学生と文系の学生が混じる数学史の授業で、文系の学生にも流れが分かる様に、理系の学生にはある程度正確に事実を伝えるため工夫した。

②展開科目（総合科目） 「教育と科学技術」

途中 2 回分の授業を、「人間」と「教養」をテーマとして、同じ時間に行っている教養教育院総長特命教授全員で合同授業を行い、充実した授業となった。

③展開科目（総合科学（総合科目））「大学の社会的機能」

4 セメの学生を対象としたため受講者は少なかったが、教員の方が受講者より多いという状態で熱心に勉強していた。専門が異なる教員が協力することにより、教員にとっても有益な授業となった。

c. 学生授業評価とその評価に基づく改善

（第 1 セメスター）

①基幹科目（自然論） 「科学と情報」 数学と人間 — 数学を俯瞰する

主たる部分は、数学が現在ある様な形となるまでの歴史の解説だったが、我々人類が現在地球上にいるのは必然かどうかを、大量絶滅を含む地球史の解説から考えて欲しかったが、その部分の趣旨を理解できたのは少数かと思った。現代数学の最先端まで解説したが、正確な理解は無理として、漠然と分かることを期待した。

学生による評価は、ほぼ予期されたものであった。

②展開科目（総合科目） 「教育と科学技術」

SLA がつき、毎回受講者の意見を聞きながら授業を進めた。受講者が少なかったので、受講者との対話に務めた。学生の満足度は高かった様である。

③共通科目 （転換・少人数科目）

「基礎ゼミ」 学校教育の在り方と入学試験の功罪を考える
学生は満足していた様に思う。

（第 2 セメスター）

①基幹科目（自然論） 「科学と情報」 数学と人間 ― 数学を俯瞰する

主たる部分は、数学が現在ある様な形となるまでの歴史の解説だったが、我々人類が現在地球上にいるのは必然かどうかを、大量絶滅を含む地球史の解説から考えて欲しかったが、その部分の趣旨を理解出来たのは少数かと思う。現在の数学の最先端まで解説したが、正確な理解は無理として、漠然と分かることを期待した。

学生による評価は、ほぼ予期されたものであった。

②展開科目（総合科学（総合科目）） 「教育と科学技術」

毎回ビデオ撮りが行われ、その点にも注意が必要だった。受講者が約 20 人と少なかったなので、受講者との対話に務めた。学生の満足度は高かった様である。

1 セメで行った授業より内容を増やしたが、「内容をもう少し絞った方が良かったのではないか」との意見があり、次年度までにどうするかを考えたい。

③展開科目（総合科学（総合科目））「大学の社会的機能」

受講者が少人数だったので授業評価は行わなかったが、受講者は満足したと言っていた。

今回の様な 4 セメ以上の学生を対象とした授業を行うなら、ポスターを作って専門学部の掲示板に掲示するなど、もっと宣伝を行う必要があると思われる。

（5）柳 父 園 近

a. 教養教育院教授としての授業の狙いと取り組み

昨年同様私の場合はまず、イ) 理系・文系を問わず学生に必要な「教養としての政治学」の講義を行うことがひとつの課題だろうと考えた。しかし、ロ) 政治思想史・社会思想史のジャンルでの、いくらか専門性を帯びたテーマへの知的関心をはぐくむ講義を行うことも、もうひとつの課題ではないかと考えた。ハ) また基礎ゼミでは、社会と歴史に関する本を厳密に読む訓練、新入生の論理的思考力をはぐくむことを考えた。

- ① 「教養としての政治学」は、批判的精神を維持して政治を見ることができるとともに、必要に応じて政治に参加するシティズンシップを持つ市民の育成を考える

べきだろう。こう考えて、基幹科目では昨年度の「政治の世界のキーワード」のノートを拡充して「市民のための政治学」を模索した。

- ② ところで、現代の政治を考える場合にも有効な政治学上の基礎概念は、ヨーロッパ史の中で形成されたものが多い。政治学にはどのような性質の「西洋史の刻印」があるのだろうか。その性格は、グローバルな世界にあって今どう評価されるべきものなのか、こうした問いに答えるべく、総合科目講義では、「西洋史と政治思想」の関係を考える授業を今年も試みた。
- ③ 理系、文系を問わず、ほとんどの学生はいずれ何かの「職業」につこうとするだろう。しかし「職業」とはそもそも何か？職業を生きるとはどういうことだろうか？学生がこうした自問自答を深めて行く上での参考になることを願い、いまひとつの基幹科目授業では、「職業観念」の歴史的、社会学的な分析を講義した。
- ④ 基礎ゼミでは、つとにこれらのどのテーマにも、幕末・維新期に何ほどかは触れていると言える福沢諭吉の著書についての丸山真男の研究を取り上げた。

b. 各授業の実施状況

①基幹科目 「法・政治と社会」 政治学入門

1 セメに 2 クラス開講した。「政治」は、小規模な社会においても、国家レベルにおいても姿をあらわす。時と場合を超えて「政治の世界」ないし「政治的なもの」のもつ、一定の性格や「法則」を理解させることを目指した。例えば政治にとって「権力」の存在とその概念は不可欠である。権力はどのようにして生じ、どのようにして制度化され、どのようなときに崩壊するか、権力はどのような場合にどのような性格を帯びるか。こうしたことにつき一応のナレッジを持っていることは、政治を見る目を育てるはずである。「権力」をはじめ「政治」の世界の種々のキーワードを理解させることが「市民の政治学」には不可欠である。

しかし政治にも概念的思考にも馴染みの薄い新入生にとって、そうしたキーワード群を明確に理解するのは、必ずしも容易でないだろうと思われた。そこで A4 判 2〜3 枚のレジュメを毎回配布して、それを読みあげつつ講義することで、学生の理解の便を図った。また、毎回授業の終わりに時間をとりミニットペーパーを書かせ、そこに書かれた質問や、授業理解の中から数点を選んで次回の初めに読み上げ、くわしくコメントするようにした。

②基幹科目 「歴史と人間社会」 職業観念から見る社会史

2 セメに 2 クラス開講した。ある意味では、ひとは職業を通して社会に繋がっているとも云えるし、社会とは職業のネットワークだともいえる。だからその社会の職業観念を分析すると、その社会の構造と性格が見えてくる。伝統中国では、「職」と「業」の意味内容は異なり、一括して「職業」と表現されることはあまりなかったと言う。江戸時代の日本では「職業」と言う用語がつかわれるようになった。日本の「なりわい」「職分」「家職」「家業」等の観念は、伝統中国の職や業の観念とどのような関係にあるのだろうか。また

中国や日本の職業観と、西洋近代の **Beruf, Calling** とは、どのような異同があり、どのような思想的関係にあるのだろうか。また明治以降の日本の職業観念の特色はどのような特徴を帯びていただろうか。これらの問題を取り上げた。「職業観念」の比較思想史的な分析は、わたしたちの社会の性格を検討するのにも資するところ少なくない。マックス・ウェーバーが近代西欧の職業観念のパブリックな性格を示唆しているのにヒントを得て、このような講義を試みた。

この講義は将来の「就職」を意識している学生の関心を引いたようだった。しかし内容の正確な理解は必ずしも容易でない可能性もあると思われた。毎回 A4 判数枚のくわしいレジュメ（2011 年度版）を配布し、これによって講義した。また、毎回ミニットペーパーに感想や質問を書かせ、次回の初めに代表的ないくつかの質問に答えるようにした。このやり方は学生に好評だったようである。

③展開科目（総合科学（総合科目）） 「西洋史と政治思想」

2 セメに 2 クラス開講した。アジア的専制国家の君主の「行政」と異なり、市民の「ヨコのパブリック」の維持・発展を図る「ポリティクス」は、古代ギリシャの都市国家において初めて生じた。このように政治学、政治理論のコトバは「ヨーロッパ史」抜きでは語れない。そこでこの講義では、「ポリス」、「教会」、「封建制」、「近世都市」等の「ヨーロッパ政治思想史の諸舞台の政治的性格」の歴史的特質を分かりやすく説明することにつとめた。この方法をとったのは、イ）教養の講義では、個々の政治思想家の理論の内容を詳しく取り上げても、あまり教育効果は期待できないということ。また、ロ）将来政治学や西洋史に関係する専門的な勉強をする人にも、上記のような「舞台」の持つ歴史的・社会的な特質の基礎知識は不可欠なものであるということ。このふたつに配慮したからである。

この講義でも、A4 判数枚の詳しい講義レジュメ 2011 年版を配布し、これによって講義した。また、ここでも講義の後にミニットペーパーに感想と質問を書かせ、次回の初めにいくつかの質問に答えるようにつとめた。

④共通科目（転換・少人数科目）

「基礎ゼミ」A 丸山真男著『文明論の概略を読む』を読む

この授業のひとつの目的は、イ）＜ものごとを論理的にとらえるコトバを使って厳密に論理的に書かれている本＞を読みこなす訓練にあった。いまひとつの目的は、ロ）明治初期の日本には、種々の豊かな思想的可能性があったことの知識を学生に与えることにあった。

横井小楠や福沢諭吉などが示している世界認識、社会認識、人間認識には、驚くほど明晰な論理性が貫かれている。また、今日の日本社会の諸課題にも通じる諸課題の鋭い認識が見られる。丸山真男氏の『文明論の概略』の講義は、福沢に関してそうした特徴をあらためて分かりやすく描き出しており、イ）とロ）の達成のための教材としてふさわしいと

考えた。

とくに福沢の提唱した「議論の本位を定めるべし」の方法論は、当時の個々の問題の分析においても、時代の精神状況全体の多面的な分析においても、福沢の認識を明解ならしめている。ゼミの学生には、「方法的思考」というものの今も変わらない有効性をよく理解させるべく、また彼ら自身のディスカッションの中でその有効性を実感させるべく指導した。

ゼミは隔週2コマ続きとし、十分なディスカッションの時間を確保した。各自で質問を用意させ、それらを整理し、絞り込んだいくつかの問題をディスカッションの中で学生自身に解明させる方法をとることにした。

⑤共通科目（転換・少人数科目）

「基礎ゼミ」B 丸山真男著『「文明論の概略」を読む』を読む
基礎ゼミAと同じ。

c. 学生授業評価とその評価に基づく改善

①基幹科目 「法・政治と社会」 政治学入門

昨年同様1セメに開講したので、大学の講義の目新しさもあってか、2つのクラスとも熱心に聴講した。講義のタイトルは変えたが、中身は基本的に同じ。去年は後半には、理系の学生のみクラスでは受講態度の熱が低下した印象を持った。また去年は反応のよかったクラスでは高い授業評価が多く見られた。後半に受講態度に熱意が下がったと感じられたクラスでは、授業評価の中に低い授業評価がかなり見られた。そこで今年は後半の講義内容に若干変更を加えた。昨年より聴講態度は良かったように思う。しかし昨年もここに書いたように高い授業評価をした学生の知的関心と思考力を一層高めようとするのと、講義内容が難しいと感じる学生に対応しようとするのとの間には矛盾がある。

そこで分かりやすくするひとつの方策として、情報量を減らすことにした。たとえば、去年は講義のなかで、「ちなみに」として話したことは、本当は必要な情報だが、入門講義では省いたほうが話の筋がたどりやすくなって良いのかも知れないので、今年はかなり削減した。

成績評価は「持ちこみ可」の筆記試験によったが、両クラスともAAとAが多くDはごく少数にとどまった。

ミニットペーパーは可能な限り配り、質問に答えた。

②基幹科目 「歴史と人間社会」 職業観念から見る社会史

1セメの上記の講義に比べ、テーマのせいかクラス間での聴講の熱意に差は感じられなかった。

しかし、ひとつの社会で行われている「職業観念」の中に、どこまで公共的な役割の意識があるか、を分析するというアプローチの意義を、正確に理解してもらえるかどうかは

不安だった。授業評価ではやはり講義が難しかったとする意見がかなりあった。しかし成績評価のためにセメスター終了時に提出を求めたレポートでは、上記の観点もよく理解した優れた内容のものも少なくなかった。やはり講義をどのレベルの学生に合わせるべきなのか考えさせられる。

この講義は内容からどうしても情報量が多すぎることになった。たとえば講義の始めに、一定の方法論——イデアルティプスとはどういうものかといったこと——をかみ砕いて分かりやすく話す必要があった。昨年は時間の「有効な」使い方としては、次年度はこの部分は再考したほうがよいのかもしれない、と書いたが、そうもゆかなかった。

成績に関しては、昨年はレポートにして、コピーアンドペーストないしそれに類するものがかなりあったので、試験にした（「配布資料持ち込み可」）が、Aが多かった。

③展開科目（総合科学（総合科目）） 西洋史と政治思想

昨年と同様に、1セメで「政治学入門」を聴講した学生で、さらに政治、政治学、政治思想に興味を持ってくれた学生が聞いてくれることを期待しつつ、2セメに2クラス開講した。1セメの講義で熱心だった学生たちの姿も少なからずみられた

昨年は、はじめに「ヨーロッパ史」の概念、「日本史」の概念との関係を説明したが、この部分の講義に若干時間を多くとられた。この部分は今年は大幅にカットした。また、この講義でも説明しておくべきことがどうしても膨大になり、情報量と講義時間の制約との調整に苦労した。やや専門的な講義への橋渡しを目指す場合、情報の刈り込み方がとくに難しいことを感じた。

ミニットペーパーを利用し、学生とpの双方向的授業を心がけた。成績評価は試験（配布資料・ノート持ちこみ可）によったが、AAとAが多かった。

④共通科目（転換・少人数科目）

「基礎ゼミA」 丸山真男『文明論の概略を読む』を読む

法学部在職中の08年度に、基礎ゼミを担当し、同じ教材を使った時はうまくいったので、次のようなやり方をしようとした。イ) テキストの次回読む章につき、あらかじめ司会希望者2人を決めておく。ロ) 参加者各自で、最低1個の質問を用意させ、全員に知恵を借りながら司会者がそれらを整理して、その日のディスカッションの課題を決める。ハ) それを全員で議論して、結局何が明らかにできたか、何が分からないままになったか、を明確にする。教員は成るべく介入せず、しかし必要に応じ助け舟を出す。最後に教員がコメントをする。こういう手順である。

しかしなぜか、昨年度は、司会希望者が一貫して現れず、教員が司会せざるを得なかった。そのためか、ディスカッションもあまり活発でなく、講義への質疑応答のようになりがちだった。

しかし今年は昨年に比べ議論がかなり活発で、08年度の場合に近かった。今年は、昨年使ったマルチメディア棟の小教室（小教室の方が議論しやすいかと考え）を避け、A棟の

教室を使い、ぐらりとサークルを組んで机を並べたのが効果的だったのかも知れない。レポート内容も概して充実していた。

⑤ 共通科目（転換・少人数科目）

「基礎ゼミ B」 丸山真男『「文明論の概略」を読む』を読む

内容と方法については、基礎ゼミ A と同じ。ディスカッションの熱意、レベルはやはりよかった。またレポートの出来栄も概してよかった。

(6) 工 藤 昭 彦

a. 教養教育院教授としての授業の狙いと取り組み

教養教育院の目的である「想像力豊かで高い問題解決能力と有力な指導的人材の養成」に資することを狙いとして、次の諸点に留意しながら授業に取り組んだ。

留意点 1. 暗記する授業ではなしに、論理的に考える授業になるよう配慮・工夫した。

留意点 2. 具体事例、関連するビデオ映像、内外のフィールド調査体験談等を豊富に交えながら、現実感覚を養うよう心掛けた。

留意点 3. 新聞記事、ネット情報など、講義に関連する直近の話題を紹介し、現実的問題解決能力の向上に資するよう工夫した。

留意点 4. 教科書、手作りの最新データ集、講義内容の全体像をまとめたパワーポイント、受講生による教科書の音読等を交えながら、講義への興味を繋ぎ留める工夫をした。

留意点 5. 全ての科目で試験を行わず、出欠状況、中間レポート、ゼミでの報告内容、最終レポート等に対する評価点等を加味し、総合評価をした。レポートの評価にあたっては、読解力、文章力、論理的展開力、説明力、発想力などを重視する旨、あらかじめ受講生に伝達し、各自の努力を促すようにした。

b. 各授業の実施状況

①展開科目（総合科学（総合科目））時代の文脈からみた「食」と「農」

授業は、戦後日本における「食」と「農」が激変したメカニズムを検証し、世界の食糧需給動向を見据えながら「食」と「農」の再編シナリオについて講義した。

授業の目標は、「食」と「農」の激変がもたらす我が国特有の問題に対する理解を深め、これまでの「食」と「農」のあり方を通してグローバル化時代に私たちの暮らしを設計するヒントを得ることに置いた。

講義の内容及び実施回数は、「我が国における「食」と「農」の現状（3回）」、「農家が全面的に兼業化したメカニズム（2回）」、「戦後農政の枠組みと大転換のシナリオ（3回）」、「スロー・フードや地産地消から見えるもの（1回）」、「農地法改正と農業再編の見取り図（2回）」、「食」と「農」の再編から社会のあり方を遠視する（1回）」と、ほぼシラ

バス通り実施した。

授業は「教科書」、手作りの「最新データ集」のほか、関連資料、新聞記事等を随時提供し、農業や食料に関する現実感覚を養成するよう工夫をした。

評価は、出席状況、中間レポート、最終レポートの評価を総合して行った。出欠や授業態度については問題がないが、レポートの文章力・記述内容の水準は、学生間の開きが大きかった。

②基幹科目「経済と社会」資本主義と農業－世界恐慌・ファシズム体制・農業問題－

資本主義に馴染み難い農業に起因して発生する社会問題、政治問題は農業問題と呼ばれてきた。講義では1929年恐慌以降の農業問題の処理が、奇怪な日本ファシズムの形成・成熟運動と連動して行われ、破綻していった過程を学び、今日の世界同時不況下における農業問題を解決する社会経済体制のあり方について講義した。

授業の目標は、農業問題の処理という切り口から、ファシズム体制の形成・成熟といった社会経済体制の激変過程を解き明かし、今日多様な形で展開されている「もうひとつの世界づくり」運動に対する指針を見出す糧を得ることに置いた。

講義の内容及び実施回数は、「農業問題発生 of 歴史過程(2回)」、「農業問題の処理とファシズム体制の形成(3回)」、「農業問題の処理とファシズム体制の成熟(3回)」、「ファシズム的農業問題処理の性格と限界(2回)」、「戦後日本の農業問題(2回)」、「現代世界の農業問題(2回)」とほぼシラバス通りに実施した。

授業は、教科書、パワーポイント、当時の関連ビデオ映像、新聞記事等関連資料を提供し、歴史過程に対する実感を養うよう配慮した。また、直近の金融危機等との関連についても、考える素材となるような情報を提供した。

評価は出席状況、レポート内容等で総合評価した。1講時目の授業のせいか、途中から欠席者が多少目立つようになった。レポートの中には、これが1年生かと思われるような高い水準のものもあった。

③共通科目（転換・少人数科目）

「基礎ゼミ」現代日本の「食」について－ゼミと体験学習を通して考える

授業では、日本の「食」が直面している、食事バランスの乱れ、食料自給率の低下、食品汚染や食の偽装、食の安全性に対する不信感、世界的な食料価格の高騰等や増える飢餓人口などの問題について、資料や統計を活用したグループ討議、現地研修などを行い、理解を深めた。

授業の目標は、「変貌する日本人の食生活や食料自給率低下問題」や、「グローバルな視点で食料不足や飢餓の現状」等について理解を深め、「食」を通して現代社会のあり方を受講生各自が考える能力を養うことに置いた。

授業では、(1)「食」に関する資料を配布解説し、討論課題を整理した上で、(2)討論課題についてグループごとに資料や統計の収集と分析を行い、(3)分析結果の発表と相互の討

論を行い、その結果に基づきレポートを作成してもらった。

主な討論課題は、「日本人の食生活」、「食の安全と安心」、「食料自給率」、「スローフードと食文化」、「食の外部化・サービス化」、「世界の食糧需給」、「食のあり方と暮らし方」などであった。

また、農産物直売所や環境保全型農業に関する視察研修を行い、現地の関係者と意見交換した。

評価は、出席状況、レポート及び報告内容に基づいて最終評価した。

少人数教育は、①欠席者が少ないこと、②授業への参加意識を高められ易いこと、③思考・発表能力を相互研鑽できること、④現地調査等により現実感覚を身に付ける機会を提供できることなど、多くの利点があることを実感できた。

④共通科目（転換・少人数科目）

「基礎ゼミ」「農の世界から見えるもの－ゼミと体験学習を通して考える

人と物と金と情報のグローバル化が、止まるところを知らない中、あえてグローバル化に対抗する「もうひとつの世界づくり」に対する挑戦が世界各地で試みられるようになった。生身の人間が幸せに生きるためには、改めて「暮らしの拠点」を創造しなければならない—そう考える人々が増えているからだろう。その過程で、「農」の世界に対しては、これまで以上に熱い視線が注がれるようになった。この授業では、「農」の世界から見えるものやその意味について、ゼミと体験学習を通して理解を深めた。

授業の目標は、「農の世界から生命圏復元のシナリオを透視する」、「農村の現状と農業が当面する問題を理解する」、「グローバルな視点で飢餓や環境問題との関連を理解すること」などに置いた。

授業にあたっては、(1)関連資料を配布解説して、討論点を整理し、(2)討論点についてグループによる資料や統計の収集と分析を行い、(3)分析結果の発表と相互討論を深め、(4)その結果を基にレポートを作成してもらった。討論課題については、「時代の文脈からみた農」、「農の世界のビジネスチャンス」、「環境・景観資源としての農」、「農業の工業化と有機農業」、「日本農業衰退のメカニズム」、「農を取り巻く国際的枠組」、「自民党農政から民主党農政への転換」など、多様であった。また、農村現場の視察研修を行い、先進的な農家との意見交換の機会を持った。視察研究のレポートを相手先に送付したところ、「おもしろい」、「参考になる」とのメッセージをいただいた。

評価は、出席状況、レポート及び報告内容に基づいて行った。少人数教育は、既述の通り、多くの利点があると実感した。

⑤展開科目（総合科学（総合科目））環境と経済・社会の調和に関する思想と倫理

授業では、岩佐茂著『環境の思想』創風社をテキストに使用し、環境と経済・社会の調和に関する思想や理論について学ぶ予定であった。しかし、内容が難解すぎることから、本テキストについては参考書とし、授業は自前で作成した講義資料、ビデオ映像、パワー

ポイント、新聞雑誌記事、体験談等を交えながら実施した。

授業の目標は、①環境問題を考える多様な思想や倫理についての理解を深め、②豊富な知識と研究課題を身につけることを目標とした。

初回の授業オリエンテーションで、次のような講義内容をあらかじめ受講生に提示し、ほぼこれに沿って授業を行った。

第1回「環境問題への多様なアプローチについて」、第2回「地球環境問題の関連図」、第3回「環境時代に人々が考え始めたこと(環境倫理や環境思想への橋渡し)」、第4回「経済と環境(経済理論)(経済学は環境をどのように扱ってきたのか)」、第5回「環境法の枠組み1(国際条約・国際法)」、第6回「環境法の枠組み2(わが国の環境法の体系と成立過程)」、第7回「環境倫理学とは何か(倫理学等は何をどのように問題にしてきたか)」、第8回「環境と経済・社会の調和(持続可能な発展)」、第9回「加藤武尚『新環境倫理学のすすめ』を読むⅠ(倫理的規範の成熟と効力)」、第10回「加藤武尚『新環境倫理学のすすめ』を読むⅡ(倫理的規範の成熟と効力)」、第11&12回「佐和隆光『グリーン資本主義』を読むⅠ(環境と経済・社会の調和は可能か)」、第13&14回「佐和隆光『グリーン資本主義』を読むⅡ(環境と経済・社会の調和は可能か)」

ただ、火曜日の授業は、合同講義で2回分を圧縮せざるを得なかったため、他の時間に適宜内容を補充した。

評価は、出席、中間レポート、最終レポートの評価を総合して行った。最終レポートでは「講義内容の中から、各自興味があるテーマを取り上げ、自由に論じなさい。但し、講義資料以外に参考にした文献名を記載の上、末尾に講義についての感想を述べること」というテーマを課したが、自ら専門的文献を読破して論述するなど、大変な力作が数点あり、改めて本学学生の水準の高さを実感した。

c. 学生授業評価とその評価に基づく改善

①基幹科目 「経済と社会」資本主義と農業－世界恐慌・ファシズム体制・農業問題－ 〈授業評価〉

同様の授業に対して、1セメ、2セメの学生評価は、違った結果になった。受講生に理系の学生が多いか文系の学生が多いかで、評価が異なったものと思われる。ただ、共通して平均より評価が低かった項目は「理解度」及び「説明」であった。内容が戦前のことが中心だったこと、理解を助ける資料等の提供が少なかったことが影響していよう。

〈改善点〉

難しいキーワードについてレポートを課し、自ら理解を深めてもらう機会を増やす。また、現実感覚を持ってもらうために、さらに適切なビデオ映像や当時の新聞、雑誌記事等を提供するようにしたい。

②展開科目 (総合科学(総合科目)) 環境と経済・社会の調和に関する思想と倫理 〈授業評価〉

2セメの月曜日と火曜日に同じ授業を行い、評価結果は全項目とも平均前後で大きな差は見られなかった。ただし、「関連学習」と「質問」は全体評価同様、両方ともその水準が低かった。

〈改善点〉

少しテーマが多すぎ、消化不良になる項目があったため、今後改善したい。ただ、レポートをみると、学生の興味・関心が多岐に及んでいることが判明した。単純にテーマを減らすだけでなしに、講義全体のシナリオを再検討してみたい。

③展開科目（総合科学（総合科目）） 時代の文脈からみた「食」と「農」

〈授業評価〉

1セメの火曜日と金曜日に同じ授業を行ったが、学生の評価結果には大きな違いが認められた。一方の評価は、全ての項目が平均と同程度もしくはそれ以上であったのに対し、もう一方の評価は「理解度」、「満足度」、「内容」、「説明」が平均より目立って下回っていた。これについては、参加学生の中に、最初から仕方なく授業を選択し、明らかにやる気のない学生グループの存在が影響していたと思う。思い切り怒鳴りつけたのが、評価結果に現れたとしか考えられない。

〈改善点〉

最初からやる気のない学生の興味を喚起する取り組みを考えてみたいが、そこまでやる必要があるのか、疑問なところもある。むしろ、そういう学生の選択を排除する仕組みを検討した方がいいのかも知れない。

④共通科目（転換・少人数科目）

「基礎ゼミ」「農」の世界から見えるもの－ゼミと体験学習を通して考える

〈授業評価〉

TAを使わなかったこと、板書が下手だったことが、評価に反映され、これらの項目が全体の評価を下回った。「質問」や「関連学習」は平均を上回っており、成果としてそれなりに評価できるのではないかな。

〈改善点〉

現地視察等の機会を有効に活用しながら、より実りあるゼミにするよう心掛けたい。

⑤共通科目（転換・少人数科目）

「基礎ゼミ」現代日本の「食」について－ゼミと体験学習を通して考える

〈授業評価〉

機器と板書が平均を下回った。基本的にゼミ資料を配付し、機器は使用しなかったので評価結果は理解できる。板書は中々直らない。

〈改善点〉

満足度が全体評価をやや下回ったので、ゼミ資料の提供や現地視察等を充実することに

改善策を講じてみたい。

(7) 浅 川 照 夫

a. 教養教育院特任教員としての授業の狙いと取り組み (第1セメスター)

①外国語英語 「英語 A1」

2 クラス担当。毎年、リーディングクラス初年次はやや高度な英文を正確に読み解くことを目指している。語彙数が極めて貧弱なので、やや難しいテキストを選び、精読を中心にして、徹底的に辞書に当たらせる授業展開を心掛ける。この訓練ができて初めて実りある速読の段階に進めるからである。テキスト：*International Herald Tribune* (Friday, January 15, 2010) から。

②外国語英語 「英語 B1」

4 クラス担当。CALL 教室を使って、英語の Listening 力の向上を目指している。テキストにはインターネット・マルチメディア教材 LincEnglish の GoldI (全レッスン 12 課) を利用し、毎週 170 問以上のリスニング、速読読解、語彙・文法のアサインメントを義務付ける。授業ではその復習を兼ねつつ、新しい教材を聞かせながら、英語の運用能力を高めるよう工夫する。

(第2セメスター)

①外国語英語 「英語 A2」

3 クラス担当。毎回、初見のテキストをプリントして配布し、速読の練習を行う。テキストの難易度はやや高め、TOEFL 試験の練習にもなり得るものを選ぶ。できる限り日本語逐語訳を介しての説明を省き、単語の意味の類推法、速読のための構文解析、決まり文句の飛ばし読み等を解説する。授業の後半では、英語学習の基本となる精読を行う。テキスト：*The New York Times*, *The Wall Street Journal* から。

②外国語英語 「英語 B2」

2 クラス担当。後期はインターネット・マルチメディア教材 LincEnglish の GoldII (全レッスン 12 課) を利用して、基本的に前期と同じ授業を展開する。(i) 自然なスピードの会話についていける自信をつけること、(ii) ある程度の分量の英語を耳で聞いて、要点をきちんと把握できることの2点を学習目標とする。

(第4セメスター)

①外国語英語 「英語 C2」

1 クラス担当。日常会話、講義、各種アナウンス等を利用して、やや高度な Listening

演習を行う。(i) 自然なスピードの英語を聞いて、やや長いセンテンスの Dictation を行うこと、(ii) 文字に頼る癖をなくすために、シャドーイングの練習を重ねること、(iii) 講義の音声を聞いて、英語の質問に英語で答えるライティングの練習をすること、の 3 点を重点的に行う。

b. 各授業の実施状況

①外国語英語 「英語 A1」および「英語 A2」

「英語 A1」では、テキストの新聞から、Haiti faces aftermath of quake's toll, Haiti's angry God, Guilt by birth, Country without a net, Cyberattacks a final straw for Google in China, Beijing gives no signs of easing rules on Internet の記事を読んだ。日本でも話題になった世界の出来事を取り上げた内容なので、学生たちは非常に興味を持っていた。英語の学習面では、地震と Internet 関連の語彙が豊富に登場しているので、他の外国新聞や雑誌を読み際にすぐに役立つはずである。Haiti 地震関連の記事を読み終えた後、Obama 大統領の Haiti 支援演説に関する VOA の映像を鑑賞させた。新聞を読んで学習した語彙やフレーズが頻繁に使われているが、学生たちは、耳で聞いて理解するのは大変難しいことを実感したようである。

「英語 A2」では精読用に *The New York Times* から So English is taking over the globe, Your friends of friends, A battle between the bottle and the faucet, Primer for a pandemic, Snakes on the brain の 5 本、*The Wall Street Journal* から A world free of nuclear weapons の 1 本を読んだ。速読用には毎時間、A4 約 3 分の 2 程度の英文を 10 分から 15 分で読ませ、多肢選択式の設定問を用意して、理解度確認を行った。速読するためには、英語を書かれたままの順序でフレーズのまとまりごとに理解することが重要である。そのためには日本語訳をしている余裕はないので、即座に構文分析を行えること、簡単な文句は英語のまま理解すること、構文ごとに主張したい場所が決まっているので、それを把握しておくことが大切であることを認識させた。

②外国語英語 「英語 B1」および「英語 B2」

インターネット教材 LincEnglish は、1 レッスンが描写問題 25 問、質疑応答問題 30 問、会話問題 30 問、説明文問題 10 問、速読問題 19 問、文法問題 65 問から成り立っている。学生に 1 週間 1 レッスンの予習を義務付け、授業では復習問題、新規の質疑応答で理解度を試した。インターネットにアクセスできる環境であればどこでもいつでも自由に学習できるので、ほぼ全員の学生が 12 レッスンの予習を欠かさず行っていた。

授業では予習した音声の中からいくつかピックアップして、新たな内容の質問を英語で聞き、英語で答える訓練をした。口頭で答えさせることを試みたが、なかなか難しいようで、とてもスムーズな質疑応答は出来なかった。書いて答えさせる場合は、話されている英語を聞き取って、それをそのまま書こうとする姿勢がみられるので、できる限り、理解した内容を自分の英語で工夫して書くよう指導した。

③外国語英語 「英語 C2」

一つの教材では、ほぼ決まった人物の声しか聴けないので、いろいろなタイプの声と発音の癖に慣れるよう、様々な音声ファイルを教材として提供した。その上で、聞いて書くという訓練を集中して行った。

c. 学生授業評価とその評価に基づく改善

①外国語英語 「英語 A1」および「英語 A2」

「授業内容・方法の評価」の中で「説明は理解しやすかったですか」と「授業を進める速度は適切でしたか」の項目で、「どちらとも言えない」が40%を超えていた。速読用テキストでは逐語訳なしで解説し、精読用テキストは難易度の高いものを選択したので、ある程度予想された結果である。テキストの難易度は落としたいくないので、説明に時間をかけることを心掛ける。

②外国語英語 「英語 B1」および「英語 B2」

「授業以外の課題はきつかったが、とてもためになった」という評価と同時に、「他のB1クラスに比べて予習量が多すぎて、やる気を失う」という声もあった。LincEnglishの教材内容については、ほぼすべての学生が高い評価を下している。問題は学習時間であるが、本学学生の英語スキル能力を考えると、週一回の授業時間で適当に時間をかけているだけでは、とても満足のいくレベルまで能力を高めることはできない。リスニングは学習時間に比例して能力が上がるので、英語Bクラスでは、学生にとってはやや大変かもしれないが、しばらくこの教育法を貫いていこうと考えている。

③外国語英語 「英語 C2」

聞いて書くという練習は難しいが、専門課程に進む学生にとって、これからの英語学習の指針となったようである。しかし、30人を超えるクラスサイズでは、一人一人の作文を丁寧に添削している余裕がないので、どのように効率よく見てやれるかがこれからの課題である。

(8) 水 原 克 敏

a. 教養教育特任教員としての授業のねらいと取り組み

広く深い教養の上で物事を考える人、自分の独自の判断が出来る人、そして自分の意見をきちんと表明できること、その過程で、他の人と協力して、相互に学び合いができる、その基礎的資質を育成する

そのためには、彼ら自身が自ら勉学にいそしみ、多角的な視点から問題を捉え、他の人と意見交換ができるようになってほしい。

b. 各授業の実施状況

① 共通科目（転換） 「基礎ゼミ」現代の教育問題について解決策を提案

「基礎ゼミ」は初めて担当した授業である。全学部対象で少人数科目であるが、21名の学生のゼミとなった。課題は「現代の教育問題」であるので、教育学部中心に学生が集まることは想定していたが、教育学部生13名、経済学部2名、文学部1名、法学部1名、医学部・薬学部・理学部・工学部各1名という構成であった。少人数ゼミナールであるが、第1回は、幼・小・中・高・大の問題として、一般に何が言われているか、水原から授業し、受講生の感想と関心の問題意識を聞いた。第2回は、前回の感想を素材に、それぞれが自己紹介と研究方法についてアドバイスをした。第3回は、前回の関心領域を受けて5グループに分けて、何を追求していきたいかを話し合ってもらった。第4回は、グループ討議⇒決定した議題について話し合い、問題を把握して資料調べを分担してもらった。決めたテーマについて、さらに調べることができる具体的なテーマに絞って、現状分析をすることが狙いで、図書館で、そのための資料を見つけ出す、あるいはインターネットや統計資料、専門の雑誌における論の動向、新聞での世論、電話取材、法制、給料、図書等々で調べてもらった。時間内では終わらないので、来週までに報告できる程度に自分たちで進めてもらうことにし、そのためのワークシートを配布した。第5回は、先週以来、分担した事項について各自が調べてきた内容を各班で報告してもらい、班としての方針を決めてもらうことにした。TA頼は不在で忙しかったが、まずは、13:00 分担者より文献資料の紹介 一人10分で計40～50分、13:50 課題分析：水原より各グループの構想に対して指導して課題を明確化。14:20 ワークシート作成ということで、各自が作成した資料紹介のワークシートは水原に提出した。

2010年5月24日の基礎ゼミの記録「各グループの課題と研究の軸」がようやく出そろったが、必ずしも確定したものではなく、下記のような内容であった。

1. 進学校におけるキャリア教育について
 - (1) 小中高でのキャリア教育・職場教育、
 - (2) 心理学（発達）、アイデンティティ
 - (3) 外国でのキャリア教育と受験システム
 - (4) シュタイナー教育
 - (5) ゆとり教育
2. 高校とは（いかにあるべきか）
 - (1) 共通教養
 - (2) 受験への意識調査
 - (3) 必修と選択
 - (4) 外国との比較（北欧、米国、中国など）
 - (5) 英語教育・受験
3. 理想の教師養成

- (1) 教員採用試験
- (2) 研修
- (3) 社会的地位
- (4) 外国、国による違い
- (5) 県による違い
- 4. 教育格差（家庭の格差が子どもに）
 - (1) 家庭の経済的理由と教育格差
 - (2) 政策はどうしてる
 - (3) 外国（中国、アメリカ、フィンランド、イスラエル）
- 5. 理想の人間像（教育目的）
 - (1) 未来への期待
 - (2) 過去の人間像
 - (3) 現在の人間像
 - (4) 小説、漫画、教科書にみる理想像
 - (5) 法律の人間像

これらを追究ができそうな「課題」に仕立てあげなければいけないので、何を解決したいのか、よりいっそうテーマを絞ってもらうことにした。その結果、5月31日には、次のような課題とすることになった。

- 1. 現行の英語教育では、英語のコミュニケーション能力は十分には育成できない。
 ⇒英語のコミュニケーション能力を効果的に育成する解決策を提案する。
 ⇒〇〇を取り入れた授業をすれば学校では英語のコミュニケーション能力は育成できる。
 ⇒〇〇の方法、〇〇の内容、〇〇のプロセス
- 2. 現在の教員研修では、教員の人間力育成は不十分である。
 ⇒教員の人間力が効果的に育成できる解決策を提案する。
 ⇒〇〇を取り入れた研修をすれば、教員の人間力は育成できる。
 ⇒〇〇の方法、〇〇の内容、〇〇のプロセス
- 3. 現在、家庭の経済的格差によって教育格差が生じている。
 ⇒経済的格差によって生じる教育格差を是正する解決策を提案する。
 ⇒〇〇の措置をとれば、経済的格差による教育格差を是正することができる。
 ⇒人・物・金の社会的・行政的措置？
- 4. 現在の進学校の進路指導は進学指導であってキャリア教育ではない。
 ⇒キャリア効果のある進路指導の在り方を提案する。
 ⇒〇〇を取り入れた進路指導をすれば、キャリア教育として効果のある指導ができる。
 ⇒〇〇の方法、〇〇の内容、〇〇のプロセス
- 5. 現在の大学入試では高校生の日常の実力が測れない。

⇒高校生の日常的な実力が測れる大学入試の在り方を提案する。

⇒〇〇を取り入れた大学入試をすれば、高校生の日常的な実力が測れる。

⇒〇〇の方法、〇〇の内容、〇〇のプロセス

さらに、6月7日には、〇〇の内容を具体的に考えてもらうことにして、次のような提案の方向性が確定した。6月14日には、下記の内容について、再調査と討議を重ねた。

1. 提案→大学英語入試を通じた高校英語教育革命
2. 提案→教員間コミュニケーション充実、率直な意見の交換、良質な研修や日々の取組
3. 提案→奨学金改革によって教育格差是正。
4. 提案→職場体験学習を通して段階的に中学・高校の進路指導におけるキャリア教育を充実。
5. 提案→現状の大学入試に加え、内申書を重視して高校生の日常的な実力を評価。

ここまで様々な観点から論議を重ねて来ているので、方向性が決まることで、レポート内容も大体想定できるようになった。

これまで図書館のゼミ室を利用して、書庫内を動きまわることで資料などを探索してきたが、さらにマルチメディア棟も利用して、プレゼンテーションに向けたパワーポイント作りとインターネットを利用した更なる資料収集を図った。この準備に3週間ほど費やし、7月には、班ごとの発表会に入った。いずれも充実した内容であり、教員自身も含めて共に苦闘しただけの成果を得ることができた。

②展開科目「教育学」 テーマ、学校を歴史的に概説

2クラス：受講生94名（文系）、受講生44名（理系）

社会科学の教養科目として「教育学」を2クラス担当している。ひとつは、文系中心で94名の受講生、もうひとつは理系中心で44名である。いずれも学校を素材にしながら、教育の在り方を問う授業である。教育問題を考える場合、教育現象を表面的に見るだけでなく、政治・経済・社会の動向が大きいので、その種の教養と洞察力が必要であることを教えている。また、自分だけの教養や見方だけでは狭くなるので、なるべく多くの人のそれを踏まえることが必要であるので、学生と教員の双方向型の討論的な授業を展開するように努力している。

これを進める上で効果的な役割をはたしているのが、TAである。さらに今年からはチューデント・ラーニング・アドバイザーSLA制度もできたので、SLA室のサポートも受けて授業を展開した。これは授業を改善する目的が第一であるが、同時に、SLAを訓練するなどの役割も請け負ったからである。学生に対するアドバイザーとなるSLAには、相応の心構えと準備がひつようなので、私の授業づくりに参加することで、その種のレディネスを形成することも狙いとした。

TAとSLAは、1週間前に私の研究室で、私の授業計画と配布物を確認し、次の授業に臨む仕方をとったので、私自身の授業は、若い院生・学生に事前検討を受けることとな

り、その種の観点から、改善の措置を取ることができた。特に、毎回の授業では、学生からコメントと評価を受けているので、全員でその読み取りをし、かつ反省を踏まえて次の授業に対応している。その意味では、かなりきめの細かい措置が可能となった。TA 1人（院生）とSLA（学部生3名）はよく動いてくれて、授業中も、学生たちの意見を引き出すように、助言を展開し、また、グループ活動を指導した。特に、SLAは、授業外でのサブゼミを奨励するなど、より深まりのある研究会をSLAサポート室で指導することができた。

この種の授業運営は、かなりの重装備で時間的な負担が大きいので、より簡便な方法に改善することが課題である。授業は当該年度の学生たちの気質によることも大きい。さらに、教員の補助として、4人もの若いTA/SLAが入ることも教育的刺激が大きい。また、彼ら自身にとっても、受講した時以上に勉強になっていることが確認できる。その長所を生かし、今後とも、より簡便にして効果的な双方向型の授業を開発していきたい。

③総合科目「学校を考える」 教育諸科学から学校を考察

受講生 20 名（内、宮城第一高等学校生徒 9 名）

総合科目としての「学校を考える」は、教育学研究科の教員10名の参加による授業を展開した。学校を素材にしながら、教育の諸科学の入門的な方法を聞かせたいという趣旨で企画した。教育学には、教育制度、教育課程、教育哲学、教育社会学、社会教育学、臨床心理、人格心理学、教育心理学、学習心理学、発達障害学等々の細分化された専門があるので、それぞれの専門から学校の問題現象を分析するなら、どういうふうに違うのか、具体的に理解してもらおうと企画したのである。

しかし、開設してみると、教育学部の学生よりは、他学部学生と宮城一高の学生など、想定外の構成に戸惑うことになった。教育の諸科学を教えるという趣旨であったが、受講生は、入門的な教育科学を聞くというよりも、さまざまな教育問題をより一般的に聞こうとする者が多かった。高校生が半数を占める構成であるから、どうしても、専門というよりもさまざまな教育現象をわかりやすく解説するという仕方になった。

授業は、受講生の質に影響されるのでやむを得ないが、実際、授業の結果は、予想を超えておもしろいものになった。高校の現場に身をおく生徒たちは、その現実の観点から学校教育を捉えなおすことができ、学校に対する認識が変化したことを口々に話していた。学校は、受け身で受け取るだけであると考えていた女子高校生たちにしてみると、学校を科学的な分析によって、さまざまな問題が析出されることは大変な驚きであった。一例を挙げれば、入試問題ひとつとっても、何の問題意識もなく受験勉強だけすればよかったという、それまでの認識と、入学試験という方法が、内容も含めてどれだけの妥当性があるのか、改めて大問題であることに気付いてしまった認識とでは、ずいぶんと落差があり、学校を見る目も大きく変化したことがわかった。

授業全体としては、大学生と高校生が混在する構成であるということで、現実の高校生の学校生活と大学生の学生生活とを実際に比較しながら考察を進めることができたこと

は面白かった。また、人数も全員で20名であるから、ゼミのような探究的雰囲気での授業を進めることができたこともよかった。特に、高校生は安心して話し合いに参加することができたようである。

学校とは何か、いかにあるべきか、なぜさまざまな教育問題が噴出するのか、これを教育の諸科学を通すことで、やや科学的な視点で捉えることができるようになったことは、この種の授業の成果としてよかったと判断できる。それにしても、よい授業であっただけに、もう少し受講生が多くても良かったのという思いは残った。

(9) 藤 本 敏 彦

a. 教養教育院特任教員としての授業の狙いと取り組み

大学は「知識基盤社会」においてこれまで以上に期待され、専門教育の水準も年々高度になっている。その傾向に比例する様に新しいストレスも増加し、大学生の生活基盤に無視できない影響を及ぼしている。「スポーツ実技」や「体と健康」では学生が健康的かつ円滑な生活基盤を維持する教育を行うため以下の項目を教育のねらいとした。

- ①生涯にわたる心身の健康を維持するための知識・技術を習得する。
- ②他者とのコミュニケーションを必然的に持たせる。
- ③リーダーシップを育成する。
- ④本学の「教養教育の理念」の重要性を「武道の理念」を通して学ぶ。
- ⑤日本古来の伝統を知ることによって国際比較観点を持たせる。

b. 各授業の実施状況

①共通科目 「スポーツ A」「スポーツ B」 ソフトボール

「スポーツ A・ソフトボール」は1・3セメスターに週5コマ開講し、2・4セメスターには週3コマ開講した。この授業の目的は1. 試合を中心にソフトボールに必要な基本技術を実習し、ソフトボールの楽しさを体験すること、2. 体力の向上とスポーツによる心身のリフレッシュを図ること、3. チーム内における役割、特にリーダーの役割を経験すること、4. スポーツを通じてコミュニケーションを図ることであった。

野球系のスポーツの練習は1つの野球場で30人程度が限界である。東北大学ではソフトボールを40～60人の多人数クラスで行うため、基礎練習が十分に行えない。このため試合の中での技術習得を重視した。試合で技術を向上させるためには幾つかの要因が必要で、各チームに熟練者を均等に配置すること、および対戦相手チームとの実力を均衡にすることを心がけた。またチームメート間でのコミュニケーションを円滑に図るため、さらにはリーダーシップの育成のため、ポジションや打順の決定、相手チームとのルールの摺り合わせは週替わりのキャプテンが中心となり学生自身で行うよう促した。さらに学生間のコミュニケーションを円滑視するため簡易の名札を使用した。教員は好プレーをした学生を大きな声で褒め、またエラーをした学生を安心させる声かけをするよう心がけた。試合はリーグ戦で行い優勝チームを決定し、学生の意欲の維持に努めた。2セメスターの「ス

スポーツ A・ソフトボール」は冬季であるため、ソフトボール以外に、バスケットボール、フットサル、卓球などの球技を行った。しかし学生評価では 2 セメスターでもより多くのソフトボールの時間数を確保してもらいたいとの意見があり、何らかの改善策が必要と考えている。

「スポーツ B・ソフトボール」は 3 セメスターに週 1 コマ開講した。基本的に授業の目的や方針はスポーツ A と同様であるが、スポーツ B ではやや高度な戦術（ダブルプレーや守備位置のシフトなど）の習得を試みた。スポーツ B の履修者は経験者の占める割合がスポーツ A よりも高く、高度な戦術を行うことができた。この際、初心者などへの心理的配慮（エラーをした時の対処）も経験者が行ってくれたため、学生の授業への満足度は高いものであった。ただし今後、経験者の割合が減少することを想定した授業計画が必要であろう。

ソフトボールの評価は出席日数をもって「合否」判定とした。成績評価については科目委員会でもより良い評価法を議論中である。東北大学におけるスポーツはシラバスの目的が示すように技術習得に重点をおいて評価することは適切ではない。ソフトボールでは欠席回数が 4 回になると「否」としている。しかし授業態度やその他の要素も評価の対象となるため、来年以降は AA・A・B・C・D の 5 段階評価を用いることを検討している。

②共通科目「スポーツ B」 武道

「スポーツ B・武道」は 3 および 4 セメスターに各 1 コマ開講した。この授業の目的は「日本の伝統文化」の一端を「武道」を通して経験し、その精神に触れることである。武道種目は 3 セメスターに合気道および柔道、4 セメスターに空手および剣道を行った。東北大学における武道は佐藤 明准教授が担当されている弓道が継続的に行われており高評価を受けている。しかしそれ以外の武道種目は履修生が減少し 5 年前に非開講となっていた。履修生の減少の原因として「痛い」「他者との接触がいや」「臭い」などが挙げられる。ところが東北大学では世界各国からの留学生が増えつつあり、専門領域の学習と共に日本文化を学ぶ教養教育の機会が求められている。そこで以下のことを改善し武道教育を本年度より新たに展開することとした。

1. 目的が技術の習得ではなく、日本文化に触れることであることを周知した。
2. 武道の理念の説明時間を比較的多くとる（礼儀の意味、思いやりの精神など）。
3. 稽古など他者との接触は段階を踏んで導入することとした。
4. 道具を清潔に保つため光触媒などを用い除菌を行った。

学生評価は概ね良好であるが、種目によっては一種目を長く行いたいとの意見が寄せられており授業形態に改善すべき点があると考えている。また今年度の留学生の履修は全履修者の 1/4 程度であったが、今後増加することを予想し言語など対策が必要になると考えている。成績評価は開講数の 2/3 以上の出席とし、技術評価は行わなかった。

③共通科目「身体と健康」 身体文化と科学

この授業はスポーツ担当教官がオムニバス形式で担当するものであり、藤本の担当は「トレーニングの基礎知識」と「運動と脳」の2コマであった。詳細は私が授業責任教員ではないため省略するが、授業のあり方に改善の余地があり現在保健体育科目委員会において協議中である。

④共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」 マッスル

この授業の目的は科学の基礎を楽しみながら学ぶこと、プレゼンテーションの方法を学ぶこと、そして筋力トレーニングや筋肉ケアの基礎を学ぶことである。学生が研究班を作り筋肉に関わることを調べ、プレゼンテーションを行った。またプロ野球のコンディショニングコーチを招聘し、筋力トレーニングや筋肉ケアの実習を行った。研究対象は事由であるが、課題を科学的に捉え、調べる目的、仮説、論証の方法、結果、導き出される事実をプレゼンテーションすることを条件とした。教員は科学的プレゼンテーションの一例として、体の動きと筋肉の働きの関係について毎週プレゼンテーションを行った。

第1週目にセメスター内での進捗説明と研究班の編成を行った。第2週目では各研究班のテーマの決定を行い、第3～11週目に調査・研究活動を行った。第12～14週目はコンディショニングコーチによる筋肉ケアの実習を行った。毎回ミニットペーパーを用い、各班の進捗状況を報告してもらい、次週のために問題点の洗い出しを行った。

c. 学生授業評価とその評価に基づく改善

①共通科目 「スポーツ A」「スポーツ B」 ソフトボール

学生授業評価は概ねどの評価項目においても良好であった。これまで最も多かった学生からの要望は雨天後日のグラウンド状態の改善であった。学生支援係のご協力で、グラウンド整備がなされ、雨天の次の日にソフトボールができない状態は減少した。しかし基本的に川内北キャンパス野球場の水はけ状態は依然として悪く根本的な改修が必要と思われる。次に雨天時・冬季の種目変更について、いろいろなスポーツを行いたいとの意見もあった。施設との兼ね合いもあるが、教員として引き出しをさらに増やす努力が必要と考えている。またレクリエーションなスポーツでも競争心をくすぐる若干の工夫は必要である。チーム成績を参加者が見やすいような工夫が必要と考えている。

今年度の授業では学部によって「ソフトボール」の評価に違いが見られた。特定学部の授業では評価が委員会平均よりも低く、他の学部は委員会平均をやや上回っていた。特定の学部と他学部では学生気質が異なる印象があり、「東北大学でのスポーツ教育の意義」をより明確に伝えるなど、指導方法に一層の工夫が必要なのかもしれない。

②共通科目「スポーツ B」 武道

学生授業評価は概ねどの評価項目においても良好であった。この授業は1セメスター内に2つの武道種目を各7週間の予定で行った。本年度は武道教育の再開の年であるためパイロット的な意味を含めこの形態とした。どの種目も好評であったが、一つの種目を長く

行いたいとの意見が出された。今後、受講者の増加が見込めた段階でそれぞれの種目を独立させ、スポーツ教育の充実を図りたい。またスポーツBでは留学生の受講を見込んでいることから言語への対策を考える必要がある。

③共通科目「身体と健康」 身体文化と科学

身体文化と科学については学生授業評価の結果が手元にないため一般的な問題点をのべる。身体文化と科学は各教官がオムニバス形式で授業を担当しているが、系統立てた授業ではない。身体文化と科学の理念を見直し、授業に系統性を持たせることが急がれる。そのためには教科書の導入や担当教員の再編成、綿密な授業計画の作成などが必要と考えられる。現在、教科目委員会で検討中である。

④共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」 マッスル

学生授業評価は概ねどの評価項目においても良好であった。初年度の授業としては目的である「科学的なプレゼンテーションを行う」は「科学的なプレゼンテーションに挑戦する」という形で一応達成したと思われる。しかし反省点は多々見つかった。まず研究対象を幅広くとりすぎたため、学生がテーマを決めかねたこと、研究対象が複雑化し時間が不足したこと、全体として統一性がなかったことである。この点について 23 年度以降はテーマを 3 つ程度にまとめ学生に提示したいと考えている。次に学生のインターネット情報の多用が目立った。1 年生の段階では調査・研究の足がかりとしては許される範囲と思うが、極力避けるよう授業の工夫が必要であろう。簡単な実験や実習を通して得た結果を独自の視点で概説する研究が望ましいと考えている。またプレゼンテーションにおいては、事前の準備(使用するソフトウェアの統一など)を教官が細やかに指導する必要があると感じた。

今年度はプロ野球のコンディショニングコーチを招聘し、主にテーピングの実習を行った。東北大学では多くの学生がスポーツ障害に対して独自に対応していることが多く、比較的多くの情報を提供できたと思う。また普段出会うことができないプロスポーツの一端に触れることができたことも学生に有益だったと思われる。

9. SLAの実施について

—全学教育学習支援プロジェクト SLA（スチューデント・ラーニング・アドバイザー）システムの開発—

教養教育院特任教員 水原 克敏

総長室助手(SLA サポート室室員) 足立 佳菜

開発員 鈴木 学

1. 事業目的

「全学教育学習支援プロジェクト SLA（スチューデント・ラーニング・アドバイザー）システム —スチューデントアドバイザー制度（仮称）の実践—」は、東北大学全学教育における学習支援をスチューデント・ラーニング・アドバイザー（SLA）を核として行うものとして、2010 年度より開発を行っている事業である。具体的には、本学学部 1～2 年生を主たる対象として「学生同士の学び合いのネットワーク」を構築すること、またそれに伴い東北大学内（全学教育対象）の学習支援組織の連携協力体制を促進することを目的としている。

本事業の活動主体となる学生スタッフのことを、「スチューデント・ラーニング・アドバイザー（SLA）」と呼ぶ。SLA の活動目的は、主に学部 1～2 年生（全学教育）に対する学習支援・補助である。SLA には、学部学生と大学院生どちらも従事することができるが、主力としては学部 3・4 年生を想定しており、支援対象となる学生と、少し上の先輩とのつながりを重視している。

2. 実施課程

本事業の活動拠点は、東北大学川内北キャンパス マルチメディア教育研究棟 1 階エントランスホール部分である。SLA の活動場所を「川内ラーニング・プラザ」（仮称）、本事業の開発・運営を行う事務室を「SLA サポート室」とし、2010 年 5 月 17 日の SLA サポート室完全開設を皮切りに、本格的に活動が開始された。以降の、活動履歴の概略は、次頁の表の通りである。

本事業は、大きく 3 つの核となる活動で学習支援を行っている。それは、①窓口対応型個別学習支援（通称：個別 SLA）、②授業連携型受講生支援（通称：授業 SLA）、③自主ゼミ支援の 3 つである。

①窓口対応型個別学習支援（以下、個別 SLA）は、学生（1～2 年生対象）からの学習相談・質問を川内ラーニング・プラザに開いているカウンターにて SLA が受け付けるものである。平日の 2 限～5 限（10：30～18：00）の間、主として物理・数学・化学・英語の質問を受け付けた。2010 年度後期から、英語に関しては「英会話ゼミ」を開催するなどし、SLA 側からの発信型学習支援を展開するようになっている。

②授業連携型受講生支援（以下、授業 SLA）は、TA のような形で授業に配置され、担当

授業の受講生を対象として学習支援を行うものである。TA と異なるのは、よりコンセプトを焦点化し、「学生同士の学び合いの創出」を目指していることである。具体的には、授業を核としながら、意欲のある学生同士で授業外のサブゼミを行うなどの支援に結びつくことを目標としている。

③自主ゼミ支援は、(現在のところ) SLA サポート室が主となり、既存の自主ゼミに対する支援と自主ゼミの斡旋を行うものである。自主ゼミという形態は、本事業の目指す「学生同士の学び合いのネットワーク」をまさに体現している一例であると捉えている。そこで、既に活発に活動を行っている自主ゼミに対し、さらに活動が円滑になるような支援を行ったり、彼らからニーズを聞き取る作業などを通して、既存・新規の自主ゼミに対する支援方法を模索してきた。

【事業活動履歴 概略】

2010 年 2～3 月	本事業準備期間 (於 教育学研究科水原研究室内)
4 月 1 日	事業活動開始 / 授業 SLA 各授業 (2 授業) で随時活動開始
4 月 9 日	平成 22 年度全学教育前期授業期間開始
5 月 14 日	個別 SLA 質問相談窓口受付開始
5 月 17 日	SLA サポート室完全開設
7 月 22 日	平成 22 年度全学教育前期授業期間終了 (～8 月 6 日補講期間)
7 月 29 日	第一回 SLA 向け合同説明・交流会開催
8 月 6 日	個別 SLA 質問相談窓口受付終了
8～9 月	協力教員訪問、後期活動準備等
10 月 1 日	平成 22 年度全学教育後期授業期間開始
10 月 1 日	授業 SLA 各授業 (3 授業) で随時活動開始 自主ゼミ支援に向けて、放課後 A 棟 4 階教室貸出支援開始
10 月 5 日	第二回 SLA 向け合同説明・交流会開催
10 月 12 日	個別 SLA 質問相談窓口受付開始
11 月～	来年度新入生向け学習支援&SLA 利用案内冊子作成開始
11 月 26 日	平成 22 年度第 3 回学生支援審議会 FD にて事業報告
12 月 22 日	Web ページ作成開始
2011 年 1 月 27 日	平成 22 年度全学教育後期授業期間終了 (～2 月 10 日補講期間)
2 月 10 日	個別 SLA 質問相談窓口受付終了 自主ゼミ合同報告・交流会開催
2 月中	来年度新入生向け学習支援&SLA 利用案内冊子 完成予定
2～3 月中	有志の SLA による、来年度準備 予定

なお、2010 年度の前期・後期の SLA の体制は添付資料 1 の通りである。参照いただきたい。

資料 1 2010 年度 前期・後期 SLA 体制

1. 前期 SLA 体制

○開発チーム 鈴木学（教 D2）、佐藤由佳（理・学振研究員 PD） 計 2 名

○SLA 個別 SLA：16 名（物理 4 名、数学 4 名、化学 2 名、英語 6 名、その他 1 名）

※化学・英語兼任あり

授業 SLA：4 名、事務補助 SLA：1 名

計 21 名

表 1 前期 SLA 所属別登録状況

	理	教	文	工	経	国際	計
1 年				個別 1 名			1 名
2 年		授業 4 名 事務 1 名			個別 1 名		6 名
3 年	個別 2 名			個別 1 名			3 名
4 年	個別 3 名		個別 1 名				4 名
M1 年	個別 2 名		個別 1 名			個別 1 名	4 名
M2 年	個別 3 名						3 名
計	10 名	5 名	2 名	2 名	1 名	1 名	21 名

※前期は、途中採用が多くあった。

2. 後期 SLA 体制

○開発チーム 鈴木学（教 D2 年） 計 1 名

○SLA 個別 SLA：24 名（物理 7 名、数学 6 名、化学 5 名、英語：5 名、その他 1 名）

授業 SLA：5 名、事務補助 SLA：1 名

計 30 名

表 2 後期 SLA 所属別登録状況

	理	教	工	環境科学	文	経	農	計
1 年			個別 1 名					1 名
2 年		授業 3 名 事務 1 名				個別 1 名		5 名
3 年	個別 2 名	授業 1 名	個別 1 名					4 名
4 年	個別 8 名		個別 1 名		個別 1 名		個別 1 名	11 名
M1 年	個別 1 名	授業 1 名	個別 2 名	個別 3 名	個別 1 名			8 名
M2 年	個別 1 名							1 名
計	12 名	6 名	5 名	3 名	2 名	1 名	1 名	30 名

資料 2 2010 年度 窓口対応型個別学習支援（個別 S L A）利用状況統計データ

1. 利用学生のべ数・実数

	5 月	6 月	7 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	合計
のべ数（人）	9	30	46	44	71	52	101	36	389
実数（名）	5	19	31	30	41	35	75	22	150（※）

※各月の実数は月ごと（月間実数）。合計の実数は、すべての月を通しての実数（＝年間新規利用者数）。

2. 利用内容別利用学生数

単位（件）	5 月	6 月	7 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	合計
物理	4	20	19	15	26	17	23	3	127
数学	3	4	19	11	23	27	46	20	153
化学	0	3	10	5	10	6	13	8	55
英語（英会話）	1	2	4	8	2	3	9	0	29
その他	2	1	1 (仏語)	5	6 (生物等)	0	2	0	17
合計（※）	10	30	53	44	67	53	93	31	381

※1 人の質問で複数の質問内容（科目）にまたがる場合や、同じ質問内容で来た同グループ複数人を同時に対応する場合があるため、1 の表の合計数と合わないことがある。

3. 所属別利用学生数（のべ数）

単位（人）	5 月	6 月	7 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	合計
工学部	4	14	23	17	23	14	54(+1)	23	154 (+1)
理学部	5	11	12	14	40	28	32	11	143
農学部		3	7	6	3	3	5	1	28
薬学部		1	1						2
文学部		1	1	2			2		6
法学部			2						2
歯学部				1	3	2	5	1	12
医学部				2	1	3	2		8
経済学部				2					2
教育学部					1	2			3
合計	9	30	46	44	71	52	100(+1)	36	388(+1)

※人数はのべ数

※工学部の 1 月（+ 1）は、高校 3 年生の入学予定者。

10. 『読書の年輪』の発行

教養教育院は、東北大学アクションプラン（井上プラン）に基づき、教養教育への寄与を重要な課題としている。そこでその一環として、新入生が勉学を始める上での一つのガイドブックたりうる『読書の年輪——研究と講義への案内』を2010年4月に刊行し、新入生に配布した。この小冊子は、教養教育院に属する総長特命教授たちが、各自の講義やゼミをめぐり、またそれらの背景にある研究生生活の一端をも紹介するべく6冊の本を選んで紹介したものである。

昨年この小冊子を発行するにあたっては、学生の反応を見たうえで次年度以降も継続的に刊行する可能性を検討することとしていた。しかし7月にこの冊子について1年生の意識を調査したところ、多くの学生にはこの冊子の存在についての印象が薄いことがわかった。ただしそれは、この冊子が、入学時の種々の手続に関する文書類とともに配布されたため、手続きに追われた彼らの関心をあまり惹かなかったためであることも明らかになった。またこの調査をきっかけとしてあらためて読み始める学生もあった。そこで2011年度には、オリエンテーションにおいて積極的にこの小冊子に関する紹介を行うなど、この冊子の存在に新入生の注目を促す工夫を加え、いま一度新年度版を刊行することにした。その結果が良ければ将来の継続的発行も考えられよう。

なお、2011年度版には、2010年から総長特命教授に就任した工藤教授の原稿が加わったほか、2011年3月に退職する総長特命教授3名が旧版に執筆したものの、目次上の順序を入れ替えたうえで、学生の参考のために掲載してある。

以下に2011年版の目次項目を掲げておく。

刊行にあたって	根元 義章
乱読の履歴；そしてこれからの推薦本.....	工藤 昭彦
学問とは何か；大学は何を目指すべきか	森田 康夫
本との出会い；今、君たちだったら	海老澤丕道
「大学時代でなくてもできること」ではなく	柳父 圀近
学ぶ本・議論する本・楽しむ本・鼻歌交じりの本；出合った本	秋葉 征夫
教育・研究の舞台裏；私を支え・慰め・励ましてくれた本	海野 道郎
本誌の書籍紹介一覧	

11. 総長特命教授合同講義の実施

本年度の新しい試みとして、「総長特命教授合同講義」を2度にわたって企画・実施した。またその記録を報告書としてまとめた。

2007年に制定された井上プラン(東北大学アクションプラン)は、その筆頭に「大学教育の根幹となる教養教育の充実」を掲げた。この目標の実現を目指して設立された教養教育院には、2008年度以降、総長が選任した名誉教授が総長特命教授として招かれ、専門分野の教育・研究経験を踏まえた授業を、教養教育の場で行ってきた。今回実施した「合同講義」は、総長特命教授全員が、個々の教育努力を超えて一つの教室に結集し、講義と討論を行ったものである。

設立3年目を迎えた教養教育院では、総長特命教授個人による授業を通じた教育活動に加えて、組織全体として貢献する可能性について検討した。講演会やシンポジウムなど様々な企画を検討する中で、総長特命教授全員が参与して一つの講義を構成してはどうか、というアイディアが浮上した。

2010年度に在籍する6名の総長特命教授は、それぞれの出身部局や専門分野を異にしている。したがって、この異質なものが競演することによって、学生諸君に対して新たな知的刺激を提供できるのではないか、というのが、この合同講義の趣旨である。専門分野を横断して存在する「知の共通性」、そしてまた、専門分野を異にすることによる「知の独自性と広がり」、そのようなものを、将来性に満ちた若者たちの前で展開してみたい——それがわれわれの願いであった。

そのような願いの下にさまざまなテーマが提案され、検討の結果、最終的には二つのテーマ——「食べる・科学する・行動する」人、および「教養とは？—東北大生に考えてほしいこと—」を選択し、10月と12月の2回にわたり、総長特命教授全員が開講している総合科目の時間帯を利用し、その受講生を主な対象として実施した。われわれ全員が、この2回の講義のいずれかに報告者として登壇するとともに、報告しない回においては討論者か司会者を務め、会場の学生諸君にも、討論への積極的な参加を呼び掛けた。

この合同講義は、学生諸君に対する東北大学の期待の顕われでもある。卒業後に社会のリーダーとして活躍することが強く期待されており、それに応えるだけの資質を持った人の集まりでもある東北大学の学生にとって、卒業後の社会生活の場において的確な判断をする能力を養うことは必須のことであろう。その判断は、世の中を大きく左右することになるし、判断する個人の人生をも左右してしまう。そして、的確な判断能力を涵養するためには、少なくとも、しっかり学び、しっかり考えなければならない。

異なった専門分野を背景とした教育者・研究者による知の競演は、必ずや、そのような学生諸君に対して大いなる知的刺激を与え、自ら学び考える道に彼らを誘ったものと思われる。受講者に対して行った授業評価において、継続希望者が過半数(中間回答を含めれば8割強)を占めたことは、その傍証であろう。

合同講義の内容については、別冊の報告書『平成22年度総長特命教授合同講義 第1回「人間」 第2回「教養」』(東北大学教養教育院)を参照されたい。以下には、その目次を示す。

平成 22 年度 総長特命教授合同講義

第 1 回「人間」 第 2 回「教養」

目 次

教養教育における新しい試み：合同講義の開講（教養教育院長 根元義章）	i
------------------------------------	---

第Ⅰ部 第 1 回合同講義「食べる・科学する・行動する」人

1. 1. 合同講義の記録	
・司会（森田康夫）	1
・報告	
・「食べる」人（秋葉征夫）	1
・「科学する」人（海老澤丕道）	7
・「行動する」人（海野道郎）	14
・討論（柳父圀近、工藤昭彦、参加者）	21
1. 2. 第 1 回合同講義に対する学生の評価	29

第Ⅱ部 第 2 回合同講義「教養とは？—東北大生に考えてほしいこと—」

2. 1. 合同講義の記録	
・教養教育院長挨拶（根元義章）	33
・司会（海野道郎）	33
・報告	
・「教養教育の今昔」（森田康夫）	37
・「政治と教養」（柳父圀近）	43
・「農経の世界から見た教養」（工藤昭彦）	50
・討論（秋葉征夫、海老澤丕道、参加者）	56
・高等教育開発推進センター長挨拶（木島明博）	61
2. 2. 事前配布資料	62
2. 3. 第 2 回合同講義に対する学生の評価	66

あとがき	73
------	----

12. ティーチング・アシスタント活用への方向づくり

ティーチング・アシスタント制度は、我が国における歴史が浅いこともあり、必ずしも定着しているとは言えないが、TA制度を利用した講義の充実化が着実に進行している傾向にある。一方、教員側にもTAを活用する技術に習熟しているとは言い難い現状にあることも問題点として挙げられた。この用の状況を踏まえ、前年度は各教授のTA活用状況を調査し、それをまとめたTA活用調査資料を院長に提出した。

今年度は前年度までの活用状況とそれに基づく改善状況を踏まえ、特命教授懇談会等でTAについての問題点や改善要望点をさらに検討した。その中で特に、TA採用にあたっての大学院生の確保について前年同様に教務課の支援を要請すること、期末試験において受講学生数の多い講義については試験監督の補助者を委託する手続きを簡素化することなどを要望した。

事務担当者の協議により、特に受講学生数の多い講義の期末試験については試験監督の補助者を委託する手続きについては、さらに事務的に協力できる体制にあることが紹介された。

13. 会議の実施状況

(1) 教養教育院連絡会議

構成委員：根元院長、木島副学長、総長特命教授（秋葉・海野・海老澤・森田・柳父・工藤）、特任教員（浅井・水原・藤本）、 関内学務審議会教務委員長、高橋教育・学生支援部長、柳橋学務課長、関係事務職員

第 1 回（平成 22 年 4 月 19 日）

協議事項：「教養教育院連絡会議」と「総長特命教授連絡会議」の 2 つの連絡会議を
設置の設置について
今年度の検討事項に SLA、外国語教育、保健体育を追加すること
次回からの会議の開催日について

第 2 回（平成 22 年 5 月 17 日）

協議事項：今年度の検討事項について
「読書の年輪」の増刷について

第 3 回（平成 22 年 6 月 21 日）

協議事項：教養教育院の在り方・将来構想について
SLA について
外国語教育について
保健体育について

第 4 回（平成 22 年 7 月 26 日）

協議事項：教養教育院のあり方・将来構想について
SLA について

第 5 回（平成 22 年 9 月 30 日）

協議事項：教養教育院のあり方・将来構想について
SLA について
外国語教育について
保健体育について
合同講義について

第 6 回（平成 22 年 11 月 2 日）

協議事項：教養教育院のあり方・将来構想について
SLA について
外国語教育について
保健体育について

第 7 回（平成 22 年 11 月 30 日）

協議事項：教養教育院のあり方・将来構想について

年次報告書について
第2回合同講義について
SLAについて
外国語教育について
保健体育について

第8回（平成22年12月14日）

協議事項：総長との懇談について
第2回合同講義について
SLAについて
外国語教育について

第9回（平成23年1月25日）

協議事項：年次報告書について
ホームページの管理について
総長との懇談について
SLAについて
外国語教育について
保健体育について

第10回（平成23年2月22日）

協議事項：年次報告書について
ホームページの管理について
総長との懇談について
教養教育院のあり方・将来構想について
SLAについて
外国語教育について
保健体育について

（2）総長特命教授連絡会議

構成委員：根元院長、木島副学長、総長特命教授（秋葉・海野・海老澤・森田・柳父・工藤）、関内学務審議会教務委員長、高橋教育・学生支援部長、柳橋学務課長、関係事務職員

第1回（平成22年4月19日）

協議事項：教養教育院の今年度活動について
読書の年輪の追加印刷について
ホームページについて
次回以降の会議の開催日について

第2回（平成22年5月17日）

協議事項：読書の年輪の追加印刷について

教養教育の将来構想について

第 3 回（平成 22 年 6 月 21 日）

協議事項：シンポジウムの開催について

教養教育の在り方・将来構想について

第 4 回（平成 22 年 7 月 26 日）

協議事項：シンポジウム開催について

読書の年輪の反応について

第 5 回（平成 22 年 9 月 24 日）

協議事項：新入生に読んでほしい本リスト作成について

来年度以降の教養教育院の運営について

学務審議会委員の交代について

第 6 回（平成 22 年 11 月 2 日）

協議事項：合同講義について

第 7 回（平成 22 年 11 月 30 日）

協議事項：シンポジウム開催について

読書の年輪の刊行について

第 8 回（平成 22 年 12 月 14 日）

協議事項：事務補佐員の退職について

第 9 回（平成 23 年 1 月 25 日）

協議事項：シンポジウムの開催について

TA の配置、活用等について

読書の年輪の刊行について

第 10 回（平成 23 年 2 月 22 日）

協議事項：4 月に開催する合同講義の講師について

読書の年輪の刊行について

（3）教養教育院総長特命教授懇談会

教養教育院の総長特命教授（6 名）が意見交換を行う

第 1 回（平成 22 年 4 月 1 日）

協議事項：年報について

教養教育院の役割分担について

教養教育院のウェブページについて

今セメの講義について

ホームページの改訂について

懇談会に開催日時について

第2回（平成22年4月25日）

協議事項：年報の編集・刊行状況について

学務審議会の報告など

特命教授の役割分担について

ホームページ管理について

シンポジウムの開催及び情報交換会議について

秘書関係

TA関係」について

第3回（平成22年5月6日）

協議事項：『読書の年輪』増刷について

ホームページ更新について

教養教育院メーリングリストについて

教養教育院として外向けの活動について

懇親会の開催日について

第4回（平成22年5月20日）

協議事項：『読書の年輪』の増刷について

ホームページの更新について

講義について

教養教育院のメーリングリストについて

本の購入手続きのガイドライン

東北大学 Annual Review 2009 について

学務課への事務連絡の仕方などについて

第5回（平成22年6月10日）

協議事項：ホームページの英文化について

Annual Review について

ソーターの購入について

図書の購入の手続きについて

シンポジウムの企画について

『読書の年輪』の管理について

第6回（平成22年6月24日）

協議事項：教養教育院企画事業について

教養教育院年報の「雑誌新聞総合カタログ」への掲載について

『読書の年輪』について

第7回（平成22年7月8日）

協議事項：合同講義、その他、教養教育院の企画について

「読書の年輪」について

東北大学ポータルシステムの内容及び活用方法等について

第 8 回（平成 22 年 7 月 22 日）

協議事項：『読書の年輪』について
合同講義（仮称）について

第 9 回（平成 22 年 9 月 3 日）

協議事項：『読書の年輪』について
合同講義（仮称）について
講演会またはシンポジウムについて
東北大学ポータルシステムについて

第 10 回（平成 22 年 9 月 21 日）

協議事項：後期授業時間割と会議スケジュールについて
合同講義について
SLA について
講演会またはシンポジウムの開催について
『読書の年輪』について

第 11 回（平成 22 年 10 月 5 日）

協議事項：合同講義について
総長との懇談について
『読書の年輪』について

第 12 回（平成 22 年 10 月 18 日）

協議事項：教養教育院の規約等について
合同講義について
『読書の年輪』について

第 13 回（平成 22 年 11 月 9 日）

協議事項：合同講義の学生評価について
第 2 回合同講義について
『読書の年輪』について
年報について
第 2 回合同講義のテープ起こしについて

第 14 回（平成 22 年 11 月 22 日）

協議事項：合同講義の学生評価に関する総括について
第 2 回合同講義について
『読書の年輪』について
年報について
第 2 回合同講義のテープ起こしについて
総長懇談会について

第 15 回（平成 22 年 12 月 8 日）

協議事項：第 2 回合同講義

第1回合同講義の記録

TAの問題

『読書の年輪』について

年報について

来年度の事務員雇用について

総長との懇談について

第16回（平成22年12月20日）

協議事項：第2回合同講義について

事務補佐員について

平成23年度担当科目などについて

『読書の年輪』について

年報について

第1回合同講義の記録について

授業中の事故について

第17回（平成23年1月11日）

協議事項：第2回合同講義の結果及び記録等について

『読書の年輪』について

第1回合同講義の記録等について

秘書の後任人事について

第18回（平成23年1月25日）

協議事項：合同講義の報告書について

読書の年輪について

年報について

事務補佐員について

第19回（平成23年2月9日）

協議事項：事務補佐員について

合同講義の報告書について

年報について

読書の年輪について

第20回（平成23年2月28日）

協議事項：事務補佐員について

合同講義の報告書について

年報について

第21回（平成23年3月15日）

協議事項：震災を受けての対応策について

合同ゼミの報告書の納入について

年報の作成について

読書の年輪について

教養教育セミナー（仮称）について

新年度の教養教育院の態勢について

（4）その他の会議

総長との懇談会（平成 22 年 5 月 17 日）

平成 22 年度学務審議会基幹科目委員会担当教員会議（平成 22 年 6 月 24 日、
平成 22 年 11 月 11 日）

14. 語学教育について

—外国語教育の責任部局について—

浅川 照夫

本学は教養部改組後の全学教育運営にあたって、責任部局を置かず、学務審議会すなわち学部・大学院までも含む大学教育全般に関する運営調整機関のもと、全部局教員による全学協力体制によって運営するという方式を敷いてきた。当然、全学教育の一つである外国語教育にも責任部局は存在せず、外国語科目の計画及び実施に関する事項は学務審議会外国語委員会によって統括されている。外国語担当の専任教員は主として高等教育開発推進センター、国際文化研究科、情報科学研究科、文学研究科に所属し、前もって定められた一定の授業担当コマ数に従って全学教育に出動し、それぞれの授業を担当している。

全学協力体制には、「基礎ゼミ」や「総合科目」に見られるように、全部局教員の参画を促して、これまでになく多様なカリキュラム編成を可能にし、さらに学部・研究科における成果の一部を全学教育に直接・間接に反映させることができるというプラスの面がある。しかし、全学教育に対する責任の不在は、ややもすると教養教育の意義と理念に対する深い共通理解を衰退させる要因ともなり、ただ与えられた授業担当義務のみを全うすれば良いというその場限りの教育姿勢に陥りやすい危険性も併せ持っている。

平成 15 年の言語文化部改組以降、本学の外国語教育は、名実ともに、全学協力体制に移行したが、教養部解体後から十数年にわたって続いてきた全学協力体制をこのまま無反省に続けていけば、外国語教育を取り巻く大学内外の情勢変化に対して、大学教養教育として迅速に対応できなくなるのではないかという危惧を感じている。ここ数年来の社会情勢の変化とともに、大学外国語教育は大きく変貌することを余儀なくされている。何よりも、英語教育を中心に、外国語四技能を偏りなく教育することが強く求められ、そのため外国語教員の教育能力がこれまで以上に重視されるようになってきた。初年次学生の初修外国語選択において、伝統的なドイツ語、フランス語中心主義から、語種選択の幅が広がり、その中でも中国語が多数を占めるようになったことも変化の一つである。

今や、文系・理系を問わず、次代を切り開く発想は、閉じられた狭い空間から開かれた深く豊かな知識と思考の海へと踏み出さなければ生まれてこないと言われている。大学は学問研究のブレークスルーを教養教育にも期待しているのである。外国語教育が教養教育の重要な基盤に位置付けられるものであることを考えれば、世界リーディング・ユニバーシティを目指す本学の全学教育は、真に国際的に通用する新しい時代の外国語能力を養成していかなければならないはずである。以下、外国語教育に責任部局がないという現状が招いている問題を 2 点に絞って述べるが、これらは全学協力体制を維持する限りは到底解決できそうもない問題であり、したがって、外国語教育の責任部局を早期に制度設計する必要があると考えるものである。

(1) 外国語教育改革の新たなイニシアティブ

本学全学教育では平成 21 年度から新英語カリキュラムがスタートしているが、それに先立つ数年前から、本学の英語教育をより強化すべく、複数のチームでさまざまな改革案が検討され始めていた。一つは「井上プラン」の具体的実現を目指した「教養教育プロジェクト・チーム」、もう一つは学務審議会による「英語教育の見直しに関する検討ワーキンググループ」、更に学生の海外派遣を目指した「教育国際交流プロジェクト・チーム」である。ここで特徴的なのは、それぞれのチームのメンバー構成をみる限り、英語教育の改革であるにもかかわらず、本学の英語教育に実際に携わっている英語専任教員が委員になっているのは、学務審議会の検討ワーキング・グループのみであったという事実である。つまり、英語教員総体としての意見が公の場で取沙汰される機会がなかったわけであり、言葉を変えれば、その必要性もなかったということになる。理由は極めて単純で、本学英語教育に主体的に関与する責任部局がどこにも存在していないからである。

外国語教育改革のイニシアティブをとるのは、外国語教育の専門家でなければならないと考える。たとえトップダウン方式のカリキュラム改革であっても、年間の時間割編成や授業運営の些事に詳しく、何よりも実際の授業を通して学生の外国語能力を直に把握している外国語専任教員の意見を議論に反映させなければ、十分なカリキュラム改善に結びつけることはできない。カリキュラム改編は、過去の実践の実態把握と反省に立って、より高い教育効果が数年先に実現するであろうという予測を立てつつ進めていかなければならないものである。英語にせよ初修外国語にせよ、本学の外国語教育は現状のカリキュラムで満足できるものではない。しかし、外国語教員は外国語責任部局の一員ではないという現実の下で、全学教育外国語教育の将来構想等に対し思考停止を起こしてはいないだろうか。外国語教育に専任部局がない本学において、一体どこがこれからの外国語教育改革のイニシアティブをとっていくのか、非常に心もとない状態である。現在のような全学協力体制を続ける限り、外国語教員による自律的なカリキュラム改編を望むのは、極めて難しいことであるように思われる。

(2) 初修外国語受講者数と教員数のバランス

本学における初修外国語の教員数は、言語文化部改組後、全学的に再検討されることがなかった。初修外国語に対する社会や学生のニーズが大きく変化した今、大学全体として、長期的な予想を立てて初修外国語教育に必要な教員数とその人事の在り方等について、改めて検討すべき時期に来ていると思われる。

学生の初修外国語選択に関して、本学では教員数に応じた履修者数の制限はせず、学生の第一希望を最優先してクラス編成を行っている。年度による揺らぎはあるが、数年前から、1 年次初修外国語「中国語」の履修数が大幅に増加してきている。昨年度から今年度への履修者数割合の推移をみると、ドイツ語 34%→25%、中国語 32%→48%、スペイン語 17%→14%、フランス語 14%→9%、朝鮮語 2%→3%、ロシア語 1%→1%となっている。実に半数近くの学生が中国語を履修し、逆に、ドイツ語、フランス語の履修者数が減少している。

しかし、専任教員数では、ドイツ語 14 名、フランス語 9 名、中国語 4 名、スペイン語 3 名、朝鮮語 2 名、ロシア語 1 名であり、受講者数と教員数とのアンバランスが極めて深刻な状況となっている。中国語の場合、既に放置できない状態である。履修者増に合わせて、高等教育センターでは中国語専任講師を今年度 1 名新規採用することができたが、それでも 1 クラスの平均受講者数（40 名基準）が 60 名を超え、中国語の非常勤高講師担当率も 56% を超えている。来年度以降、学生の中国語志向はますます強まることが予想され、中国語教科部会としては、大学教育の質を保証するためにも、履修者数制限を導入せざるを得ない状況である。

初修外国語受講者数と教員数のアンバランスは、各部局の外国語教員人事の在り方と密接に関連している。現在の初修外国語各語種の教員数は、教養部時代の名残を色濃く残すものである。外国語教員の人事の在り方を振り返ってみると、現在の高等教育開発推進センターの前身となる大教センター時代に、センターの外国人教員人事については、センター側が外国語委員会に推薦委員会の設置を依頼し、外国語委員会が公募要領の作成から最終候補者の決定までに関与していたという過去の一時期があった。しかし、現在では、外国語教員の人事は、初修外国語の語種の決定も含め、各部局の専権事項であり、他部局が関与することができないようになっている。既に述べたように、教養部解体後、各語種の教員が大学院研究科に分属し、教養教育における外国語教育は、分属教員数に応じて大学院研究科が必要担当コマ数を提出するという全学協力体制に変わった。毎年、学務審議会が各部局に対して、各語種の分属教員数に応じた担当コマ数を要請しているが、中国語の事情から明らかなように、初修外国語を取り巻く環境が大きく変わったにもかかわらず、要請する各語種の担当コマ数に変化はなく、また大学院研究科側も教養部以来の語種を保持していく傾向が強いので、依然として各語種の教員数に大きな変化が生じないのである。

部局人事で特に問題になるのが、本学の外国語専任教員の 90%以上が所属する大学院研究科の人事である。大学院研究科の外国語教員募集に当たっては、外国語教員ポストが旧教養部からの分属という性質を持つために、全学教育で担当する外国語の語種を指定するのが通例となっている。したがって、専門分野の業績審査と全学教育の教育能力審査が平等に行われて然るべきあるが、実際には、専門分野の論文審査に大きく比重が傾けられていると言っている。

アンバランスの問題を緩和するための方策として、一つには、分属教員ポストが全学教育外国語の授業担当義務を担わせられているのであるから、大学院研究科が自主的に全学教育における外国語教育の現状に配慮した人事計画を捻出すること、もう一つは、学務審議会を中心として全部局参加型の人事委員会方式を設けること等が考えられる。しかし、外国語教育の責任部局ではない大学院研究科に、自主的にせよ半強制的にせよ、教養教育での人事面の責任を担わせることには大きな抵抗があるであろう。本学では外国語教育人事について公に検討する場がなく、そのために大学院研究科側も全学教育側も、外国語教育の現状が変化していることを承知しながらも、従来の人事構成と分属コマ数を保持していかざるを得ないという悪循環に陥っている。

15. 教養教育院活動（平成 22 年度）の自己評価と今後の課題

教養教育院は、本年度、総長特命教授（以下特命教授）6 名、特任教員（兼務）3 名の体制で教養教育を担当した。教員各自の講義や基礎ゼミに対する取り組みについては、自己評価を含めて記載済みゆえ、以下では本院全体に関わる自己評価や今後の課題について述べてみたい。

I 自己評価

1. 教養教育に対する貢献

設置要項によれば、本院の目的は「本学の学生に対し、幅広い教育を身に付けさせるため、高等教育開発推進センターと連携して、教養教育の実施及び支援を行い、もって創造力豊かで高い問題解決能力を有する指導的人材の養成に資すること」とある。この期待に応えるべく、教員各自、講義や基礎ゼミを通して専門研究の成果を有効に活用しながら、人材養成教育に取り組んだ。

本年度はまた、本院の教授 6 名による合同講義を 2 回企画し、第 1 回目は「食べる・科学する・行動する」人というテーマで、第 2 回目は「教養とは？－東北大生に考えて欲しいこと－」というテーマで開催した。専門分野の違う教員による同じテーマでの講義や、参加学生を交えた討論は概ね好評で、継続して欲しいとの要望が強かった。

専門的立場からの教養教育に対する動機づけは、「高い問題解決能力を有する指導的人材養成に資する」という本院の目的に、少なからず貢献できたものと評価している。

また、これとは別途、教養教育に関するシンポジウムについても検討したが、時間的制約等から次年度以降改めて検討することとした。

2. スポーツ科学教育の評価

①共通科目 「スポーツ A」「スポーツ B」 ソフトボール

22 年度の授業では学部によって「ソフトボール」の評価に違いが見られた。特定学部の授業では評価が委員会平均よりも低く、他の学部は委員会平均をやや上回っていた。特定の学部と他学部では学生気質が異なる印象があり、「東北大学でのスポーツ教育の意義」をより明確に伝えるなど、指導方法に一層の工夫が必要なのかもしれない。

②共通科目「スポーツ B」 武道

今後、受講者の増加が見込めた段階でそれぞれの種目を独立させ、武道教育の充実を図りたい。またスポーツ B では留学生の受講を見込んでいることから言語への対策を考える必要があろう。

③共通科目「身体と健康」 身体文化と科学

身体文化と科学は各教官がオムニバス形式で授業を担当しているが、系統立てた授業ではない。身体文化と科学の理念を見直し、授業に系統性を持たせることが急がれる。そのためには教科書の導入や担当教員の再編成、綿密な授業計画の作成などが必要と考えられる。

④共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」 マッスル

22 年度の授業では学生がテーマを決めかねたこと、研究対象が複雑化し時間が不足したこと、全体として統一性がなかったことである。この点について 23 年度以降はテーマを 3 つ程度にまとめ学生に提示したいと考えている。次に学生のインターネット情報の多用が目立った。1 年生の段階では調査・研究の足がかりとしては許される範囲と思うが、極力避けるよう授業の工夫が必要であろう。

3. 小冊子「読書の年輪」を通した授業への招待

本院では、「読書の年輪－研究と講義への案内－」という小冊子を発行し、新入生に配布した。この冊子は、本院教員の読書歴や研究歴のほか、これから始まる講義や基礎ゼミに関連するお薦め本を各自 6 冊ずつ取り上げ、そのエッセンスを分かり易く紹介したものである。本冊子へは、他学部からも配布の要望があり、必要な部数を提供した。

しかし、学生の認知度が低いことが判明したため、認知度を引き上げ、冊子の有効活用を図るべく、差し当たり次年度は、新入生のオリエンテーション時に担当者による紹介付きで、新入生に配布してもらうこととした。

4. 組織・運営

平成 22 年度は教員 1 名が増員され、特命教授 6 名、特任教員（兼務）3 名体制となった。加えて新規に合同講義を企画・実施するなど、「本学の教員組織の充実及び教育研究の質の向上」という制度の目的に貢献できたものと評価している。

事務補佐員の業務内容については、ある程度これを定型化するため、現在の業務量、業務種類、特別業務等について精査し、次年度に向け必要な改善措置を講じることとした。

特命教授、特任教授との間で意見交換を重ね、「年報」の発行など共同で取り組むこととした。

昨年度同様、原則 2 週に 1 度「教員懇談会」を開催し、学生教育に必要な事項を審議決定するとともに、教員相互間の意思疎通を図った。

Ⅱ 今後の課題－制度的枠組みの検討・整備について

1. 現行の規約

①教養教育院の設置並びにその組織及び運営については、「東北大学教養教育院設置要項」（平成 20 年 3 月 24 日）（以下 A 要項）に規定されている。

②総長特命教授制度については、「国立大学法人東北大学総長特命制度に関する要項」（平成 20 年 3 月 24 日）（以下 B 要項）に規定されている。

③教養教育特任制度については、「国立大学法人東北大学教養教育特任教員制度に関する要項」（平成 21 年 10 月 2 日）（以下 C 要項）に規定されている。

④教養教育院の組織、人事、予算、その他運営に関する事項の審議については、「東北大学教養

教育改革会議設置要項」(以下 D 要項)に規定されている。

2. 規約上検討を要すると思われる事項

①教養教育院の職・職員については A 要項第 4 条に規定されているが、定数に関する規定はない。教養教育院の業務内容等を踏まえた将来的な教員の定数枠の設定等について、検討が必要ではないか。

②総長特命教授については、B 要項第 2 条、第 3 条で「本学を定年で退職した教授のうち優れた教育研究上の業績を有するもの…」、「かつ、特定の事項を担当するにふさわしい教育研究上の能力を有するもの」とし、その選考は第 4 条で「選考委員会の申し出に基づき、…選考し」、第 5 条 5 項で「選考委員会は、候補者を選考した場合には、当該候補者を総長に申し出る」とされている。しかし、これまで当該規定に基づき選考された特命教授は、存在しない。

現在の特命教授は、B 要項第 4 条第 2 項の「前項の規定(選考委員会の申し出に基づくという規定—引用者)に関わらず、教養教育に関する事項を主たる職務とする総長特命教授の選考については、東北大学教養教育改革会議設置要項(平成 20 年 1 月 30 日総長裁定)の定めるところにより、東北大学教養教育改革会議の議に基づき、総長が行う」という規定により選考された特命教授である。

将来的に本院に 2 種類の特命教授を選考・配置するか、それとも規定を改訂するか、検討が必要ではないか。

③A 要項第 1 条で、「東北大学(以下「本学」という。)に、教養教育院(以下「本院」という。)を置く」とされているが、教員の居室や学生指導上必要な関連施設・設備及びそれらの設置場所等については不透明であり、これら事項を盛り込んだ将来計画及び実施に向けた工程表の策定について、早急な検討が必要ではないか。

④A 要項第 3 条で「本院は…高等教育開発推進センターと連携して教養教育の実施及び支援を行い…」とあるが、具体的な支援内容等を盛り込んだ「実施要綱」について、その必要性を含めて検討が必要ではないか。

⑤C 要項第 2 条で、特任教授については、「…本学の教員を教養教育特任教員として教養教育院に兼務させ…」とあるが、特命教授、特任教授の役割分担、業務内容及び定数等については定かではない。

また、A 要項第 4 条の「職及び職員」欄に、兼務教員である特任教授の記載がない。いずれについても検討が必要ではないか。

お わ り に

年報を作成していた平成 22 年度の末に東日本大震災が起き、川内合同研究棟が被害を受け、教養教育院の 2 人の特任教員の研究室と事務補佐員の執務室が使えなくなるなどの被害を受けた。このため、教養教育院の年報の発行が 2 ヶ月近く遅れてしまった。幸い、平成 23 年度の授業は連休明けから始まり、学生は震災以前より真剣に勉学に励んでいる様に見える。

平成 22 年度末には、設立当初からのメンバーであった秋葉征夫、海野道郎の両総長特命教授と設立翌年からのメンバーであった柳父圀近総長特命教授の 3 人が退職した。教養教育院にとっては貴重な戦力を失い大きな痛手となるが、新しいメンバーを加えて再出発し、より良い教養教育院の建設を目指したい。

この年報では、設立から 3 年を経た教養教育院について、その現状を報告するとともに、自己評価を行い、問題点の指摘も行った。今後、平成 23 年度からの新メンバーも加えて、この新しい組織を実あるものとすべく、微力ながら全力を傾注し、本学における教養教育充実化の一翼を担っていく覚悟である。しかし、教養教育の充実は、教養教育院所属のメンバーによる努力だけでないうるものではない。学内外の方々の熱きご支援とご鞭撻をお願いしたい。

(参考資料)

東北大学全学教育広報「曙光」からの転載

森 田 康 夫

2010 年 4 月号 (第 29 号)

柳 父 圀 近

2010 年 10 月号 (第 30 号)



東北大学と入試問題

—現状を分析し将来を考える—

総長特命教授（教養教育院） 森 田 康 夫

私は昨年春に定年退職し、教養教育院で再雇用され、1、2年生の学生を教えている。私は数学の研究者であるが、20年前に東北大学理学部の教授となったときから入学試験の実務を継続して担当し、15年くらいからは入学試験と数学教育の研究も行ってきた。そこで、この機会に私が東北大学の入学試験と学生について考えていることを記し、皆様の参考としたい。

1. 東北大学は日本で3番目に設置された格式の高い国立大学であるが、首都圏や関西圏のような人口密集地帯にはないため、受験界では「難関校」ではあるが「超難関校」であるとは見なされていない。そのため、中高一貫の有名進学校から東北大学に入学してくる人は多くなく、入学してくる学生の約半数が、東北地方を中心とした北関東から新潟や北海道に至る地域の公立高校の出身である。

この地域では首都圏や関西圏のように上位大学への入学試験が過熱しておらず、高等学校3年生でも部活などに励むのが普通である。また最近の学力テストで秋田県が日本一の成績を取ったことから分かるように、この地方には真面目な生徒が多く、首都圏や関西圏のように生徒が層化し、下位層が勉学意欲をなくし落ちこぼれるようなことが少ない。端的に言うと、この地方には真面目な人が多く、目先を利かしてうまく立ち回ろうとする人が少ない。そのようなことが、一方では、小学校や中学校の全国テストではよい点を取る結果につながり、他方では、大学受験ではそれほどの成果を残していないことにつながっている。

東北大学を始め幾つかの国立大学での調査によると、大学受験時の成績と大学入学後の成績の間には統計的な相関性が見当たらない。これについては色々な意見があるが、私は、同じ大学の中で考える限り、入学時の成績より入学後の学習意欲の方が大学入学後の成績への影響が強いことが主な原因であると考えている。東北大学に入学してくる人の多くが、優れた才能を持っているが、大学入学時には持っている才能の一部しか開花させておらず、その結果、真面目で勉学意欲が強い性格とも合わせ、東北大学に入学後に力を伸ばす結果となっているのだと思う。各種の調査で、大学に入学した学生が力を伸ばす大学のトップに東北大学はあるが、それはこのように理解できる。東北大学はこの様な利点をこれからも生かしてゆくべきであると、私は考えている。

2. 日本では急速な少子化が起きているが、少子化にも関わらず大学が新設され学生定員が増えており、文部科学省の調査では大学に進学したいと思う人の90%程度が実際にどこかの大学に入学しており、私学振興・共済事業団の調査では私学の40%程度が定員割れになっている。このた

め、「どこかの大学に入学できさえすればよい」と考える人にとっては、自分を受け入れてくる大学は簡単に見つかり、受験勉強をする必要はなくなっている。

日本の多くの大学は受験科目を減らし、多様な入学試験を行っている。入学定員を充足し授業料を確保するため、極端なケースでは、オープンキャンパスの際に訪れる高校3年生すべてに推薦入試やAO入試の形で入学許可を与えている大学もあるようである。実質的な選抜が行われている大学でも、学力・スポーツ・特技・資格・宗教など多様な選抜を行っており、一般入試においても多様な入学試験があり、各地に出かけて入学試験を行っている大学も多い。その中でも私が問題であると思うのは、各大学には教育理念があり学生に求める資質があるが、それが無視されていることである。例えば、私立大学の工学部では、高等学校で教えている数学Ⅰ・数学Ⅱ・数学Ⅲ・数学A・数学B・数学Cのうち数学Ⅰ・数学Ⅱ・数学A・数学Bのみしか求めない大学が大多数であり、中には数学Ⅰのみでよい大学や、理科・英語・数学の中から受験場で1科目を選べばよいという大学もある。

少子化の中で大学定員が変わらないと、受験生は今までより上位の大学に入学できる様になる。大学側から見ると、入学してくる学生の質が落ちるが、この影響は下位の大学になるほど大きくなる。さらに、競争が緩和し勉強する必要性が低下したことから、高校生の学習時間は以前に比べ顕著に減っている。この様なことが、下位大学の学生の学力低下を著しくしており、卒業しても短大や専門学校並みの職にしか付けられないという事態が生じている(平沢和司氏等の研究による)。

3. 私は1964年に大学に入学したが、私達は高等学校で初等幾何学の学習を通して論理力を身に付けた。その後数学教育は現代化されたが、論理力についての配慮は続いた。しかし日本が欧米に追いついた1980年頃から日本の教育の流れは変わり、授業時間数が減り、論理力から計算に数学教育の重点が移った。1998年の学習指導要領では教科によらずに教育内容が3割削減され、数学では「資料の整理」がなくなり、理科でも「遺伝」は習うが「進化」は習わないことになった。しかし「ゆとり教育」に対する批判が強まり、新しい指導要領では理科や数学の内容は少し回復された。

さて、「入試地獄」を緩和し難問・奇問の出題をなくすため、1979年から共通一次試験が導入された。共通1次試験は1990年センター試験に衣替えしたが、センター試験は難問を排除しながら少数科目でも受験者の選抜に使えることを目指した。その結果、数学の試験では、「限られた時間で大量の問題を処理できるか」を見る試験となり、大学教員でも時間内には解けないものとなった。しかし冷静に考えると、高等学校で教えている計算のほとんどがMathematicaなどの数式処理ソフトで計算できるものであり、早く正確に計算できることは余り意味がない。

大学進学率が上がり大衆化されるに従い、大学入試では証明問題が減り計算問題が増え、現在では、証明らしい証明は一部の上位大学に限られている。このため、生徒に解き方を暗記させることにより、数学の内容が分からなくても数学の試験が解ける様になった。これは受験技術の進歩ではあるが、数学教育の目的には、専門教育で必要となる数学の知識を教えることの他に、論理的に分析して考える力を養うことがあり、理解なしで生徒に暗記させることは好ましくない。私は、先進国となった日本で必要なのは論理力と分析力であり、暗記ではなく理解が重要である

と思っている。

理解や論理力を重視する教育に変えることには時間がかかり、定年を過ぎた私は多くは寄与できそうにないが、皆様の御協力をお願いしたい。

参考文献

1. 日本私立学校振興・共済事業団私学振興事業本部、私立大学・短期大学等入学志願動向、
<http://www.shigaku.go.jp/files/shigandoukou21.pdf>.
2. 文部科学省、18歳人口および高等教育機関への入学者数・進学率等の推移、
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/17/05/05051901/006.pdf.



編集と「普遍的教養」 —はるかな思い出から—

総長特命教授（教養教育院） 柳 父 圀 近

I

戦後日本の大学の再建にリーダーシップをとった学者のひとりに、南原繁（戦後初代の東大総長）の名をあげても、誰も怪しむまい。南原は 1942（昭和 16）年の時点で名著『国家と宗教—ヨーロッパ精神史の研究』を書いて反ファシズムの立場を貫いた。1945 年以降は、なお本土決戦に固執する陸軍を抑える命がけの終戦工作を、少数の同志とともに敢行した。その南原が、「教養教育」について 1948 年度の入学式で次のように講演している。

「大学における学問研究の方法は、一切の学問の全体的連関についての正しい知識から生まれるということである。諸君は常に自己の専門とするところが全体の中で占める位置を知り、常に全体との調和ある構造に結びつけることを心がけねばならぬ。これは一般的にいつて、高い教養の問題である。特殊の研究にのみ従事して、普遍的教養という大事な仕事を怠るがために、かえって自己の専門の学に対する興味と自信を失い、学徒本来の使命をも没却するにいたるのである。

例えば、法律学徒はかつて戦時中にあつたが如き時代の巨波が法律学の全構造を脅かすや、忽ち自己の研究に対する自信を喪失し、あるいは理学を志したものが今また新しい文化の光が差し初むるや、それに眩惑せられて、自己の学問を放棄し、ほかの学科への転換を考えることが起こりがちである。」（『南原繁著作集』岩波、7 巻 180 頁。傍点筆者）。

時代の「巨波」に流されず、自己の専門的研究の「使命」と「自信」を見失わなかった南原ならではの発言である。だが、ここで「普遍的教養」と言われているものは何だろうか？

それは、決して専門的研究の準備としての単なる「予備的勉強」ではないだろう。むしろ自分の「専門」について、「学問の全体的構造」の中で意味づけうる能力のことだ、と南原は言うだろう。「そんな大仰なことは、今日の学問や大学の状況の下ではもう無理です」とわれわれが苦笑しても、天国の南原は、「それは知的退廃というものだ」と言い、「そんなことじゃ、いずれ正邪の判断力も、自分の学問への自信も失うぞ」と忠告するのではないだろうか。

II

もう 45 年もたってしまったが、大学一年の夏休みに、社会学者の故佐々木斐夫先生のご紹介で、貧乏学生だった私はその出版社のアルバイトに使ってもらうことができた。仕事の内容は、江戸時代の儒学者荻生徂徠の膨大な和綴りの諸著書各版について、総計すると全体で何文字くらいの文字数になっているかを、出版のために下調べするという、なかなか大変な仕事だった。木版刷りの 1 ページの字数を数えては、1 冊ずつの文字数を合算し、一覧表に書きこんでゆくのである。

ほぼ毎日一定の時間を作ってその出版社の資料倉庫に通い、たしか3週間ほどかかった。「いち、にい、さん、し・・・」の繰り返しだから退屈で、古文の文法を思い出しつつ拾い読みして、「少しは分かる」と安心したりした。10年ほどして、この大思想家の立派な著作集が、昭和の中国学と日本思想史学をそれぞれ代表する碩学、吉川幸次郎、丸山真男両先生の編集によってこの出版社から刊行された。

このアルバイトを通して、O編集長とお近づきになった。O氏は戦争中に、兵隊から生きて帰ったら自分で出版社をやろうと考えたのを実行し、その出版社を興されたという。この出版社は、知的レベルにおいて、また思索の品格において、卓越した多くの本を刊行していた。木造の社屋の1階は全部倉庫になっていた。2階には各分野を担当する編集者たちの仕事部屋が効率的に仕切られていた。院生になって、アルバイトの内容が翻訳などに「昇格」すると、その2階の一角で、私はOさんのお話をしばしばうかがうことができた。

III

ここで書いておこうと思うのは、Oさんから学んだ、能力としての「編集力」ということである。それは、南原が語った「全体の中に自分の専門を位置付ける」能力としての「普遍的教養」とも大いに関係があるのではないだろうか。

Oさんと話していると、さまざまな知見に接することができた。古今の本の内容や、出版事情、初版の装丁、著者たちの逸話など実に面白かった。しかしそればかりでなく、政治から思想、文学や美術に至るまで驚くべき情報量の知見を持ち、そしてそれを踏まえてOさんは独自の鋭利な判断と意見を述べられた。のちにイギリスに行ったとき、思想史家ジェームズ・ジョルと話していて、話題の豊富さと話の迫力に、同じような印象を受けた。ジョルさんの談論も、思想史、社会史、政治史そして芸術史にわたる驚嘆すべき博識を動員するものだった。しかも個性的な鋭い問題意識のもとにその該博な知見が凝縮され、その問題意識が広い知の海原をはるか遠くまで照らしだすのだった。そう言えば、そのジョル先生の談論を髣髴とさせる素晴らしい内容の著書 *Europe Since 1870; An International History* (London, 1973) も、池田清先生の訳で『ヨーロッパ100年史』として、Oさんの出版社から出た。

Oさんと話すときいつも痛感したのは、違った立場や観点に立てば、同じものがどれほど違って見えてくるかということと、そしてそうした多面的な見方を踏まえたうえで、固有の問題意識を組み立てる能力の大切さということだった。いろいろな知的世界に目配りができ、それを踏まえて「現代日本にはこの観点が貴重だ」と言う企画を立てるのが「編集」であるのをいつも印象付けられた。その意味で、すぐれた編集者は「普遍的教養人」である事を要求されている。しかし本来はむしろ研究者にこそ、そうした「編集力」は要求されていると言ふべきだろう。問題は、どうすればOさんのような「編集力」は身に着くのかである。

多少は「視野を広げて」学んできたことを、あれこれ思いめぐらしていれば、いつしか教養が沈澱してくるのだろうか……。いや、そう簡単ではなさそうだ。むしろ、立場を異にする思想を持ち、異なる分野を行く「他者」たちとの、若いころからの忌憚のないディスカッションの習慣が大事なのではないだろうか。しかしそうした習慣と「教養」は、私たちの世代あたりからしだい

に欠けがちになったような気がする。専門分化が進み、南原繁の世代はもちろん、Oさん、ジョルさんなどの世代とも違って、私たちは「精神なき専門家」の時代を、本格的に生き始めてしまったのではないだろうか。

IV

ところでジョルさんは、来日した時には、各分野の少なからぬ専門家たちに会ったらしい。そして日本の学術の水準はじつに高度なものであると、ひどく感心して帰ったという話だ。ただし帰り際にあらためて、ある政治学者に、「それぞれの分野に大変な専門家がいて、その意味での知的水準は実にきわめて高いと思った。しかし、Intellectuals はどこにいるの？」と聞いたという話である。英語でいうIntellectualsとはどういう人を指すのだろうか？われわれのいう「知識人」とは微妙に違うようである。もっとも、専門外のことは外国語ではしゃべりにくいものであり、専門のことは細かいことでも案外話しやすい。そこでジョルさんに会った人たちも、英語の会話ではもっぱら専門的な話をしてしまったのかもしれない。しかしこの話は、やはり私たちの「普遍的教養」が、きびしくジョル先生に問われている気がする。

東北大学教養教育院年報（平成 22 年度）

発 行	平成 23 年 7 月
発 行 所	東北大学教養教育院 〒980-8576 仙台市青葉区川内 41 電話 022(795)3819 e-mail: sta-kikaku@bureau.tohoku.ac.jp